

『花と魚』（座…高円寺版）

脚本・柳井祥緒

【登場人物】

酒田七生……野生動物調査会社SEA・研究員。

須田大次……須田水産専務。坂根ふるさと会の副会長。

須田千鶴……その妻。

須田日出子……坂根ふるさと会婦人部部長。大次の義姉。

須田大和……須田水産社長。坂根ふるさと会会長。

阿藤昇……大潮市坂根集落支援センターの所長。

小菅俊一……坂根診療所の医師。

草野敦之……大潮市坂根集落支援センター・職員。

草野那美江……その妻。

牟礼宇一郎……漁師。

比嘉野花……坂根神楽の舞い手。

【時】

二〇一二年七月。

【場所】

宮崎県大潮市坂根地区の公民館および神楽宿。

【補足】

■集落支援センター ■架空の行政機関。山間部など交通の便が悪い集落に対し、行政的な手続きの窓口業務と、集落の自立的な運営の支援を行うため二〇〇九年に県が設立。役場支所の集落版ともいえる存在。

■坂根ふるさと会 ■一九八九年、須田大海の発案により結成された自治組織。行政に頼らない財源づくりと村おこしを目的に運営されている。坂根集落の住民たちの意思が色濃く反映されるためふるさと会の会長は実質的な村長のような立場となる。行政機関とのやり取りもふるさと会が窓口となっており行われることが多い。

■ 第一幕・一場 ■

神楽宿の一室、

女たちが彫り物を作っている。

須田日出子、須田千鶴、草野那美江。

そこへ比嘉野 花が来る。

花 「ねえねえ、見たけ？見たけ？調査員ん先生。動物ん研究員やら言うかい暗えの想像しちよったつちやけんよ、綺麗な顔しちよったわ」

千鶴 「花ちゃん、遅刻ですよ」

花 「(気にせず)那美江さん、見たけ？」

那美江 「話した」

花 「うそ、なんで？」

那美江 「(包帯を巻いた手をかざす)被害者じゃもん。聞き込み？ 聞き取り？」

花 「やったと？ やったつけ？」

千鶴 「(たしなめる)花ちゃん」

花 「千鶴奥さんは見たと？」

千鶴 「何をです？」

花 「調査員ん先生よ。あんげな綺麗な人、こん村にはおらんわ。体ん芯がうずくやろ？」

千鶴 「ここは神聖な神楽宿ですよ。そういう話は外でしなさい」

花 「なら外ん行こうや」

千鶴 「行きません」

日出子、彫り物を一つ完成させる。

日出子 「出来た」

那美江 「日出子奥さん、ほんとう上手ね」

日出子 「もう何十年も作っっちゃいね」

と、次にとりかかる。

千鶴 「花ちゃんも、ほら」

花 「うちこんげなんすつの苦手え。ちまちましちよつちやもん。男衆もおらんし、気分乗らんわ。日出子奥さん、大和くんはどこおっちゃんるか？呼んだら来んかや？」

日出子 「(作業しながら)うちん子なら今日んほら、なんやっったつけ？」

千鶴 「報告会」

日出子 「それん参加しちよつわ」

花 「大和くんが？ なんで？」

日出子 「そりゃあんた、あん子、一応会長やかいね、ふるさと会ん」

花 「どこでやっちよつと？」

日出子 「どこやっったつけねえ」

千鶴 「公民館です」

花 「うちちよっと見ちくつわ」

千鶴 「いけません」

花 「ちっとだけ」

千鶴 「村の明日を決める大事な会です。ふざけ半分に邪魔してはいけません」

花 「ふざけちよらんよ。本気で男成分補給してえつよ」

千鶴、言い返したいが言葉が出ない。

那美江 「(道具を置く) ああ、もうダメやわ。休憩。(包帯を見せつける)がまんしちよっ

たけん、これ」

花 「まだ痛むと?」

那美江 「ずきずき疼くとよねえ」

花 「咬まれちかいどんくらいかね? 一週間?」

那美江 「毒でんあつたつちやろか?」

千鶴 「痛いのは分かりますが、少し休憩が多くありませんか?」

那美江 「ちよっと、うちんこつ疑うつもり?」

千鶴 「そういうわけでは……」

那美江 「ほんとん痛えつちやかいね。あいたたた……」

千鶴 「でも急がないと……」

日出子 「彫り物を完成させる」出来た」

花 「早ええ」

那美江 「それん上手やあ」

日出子 「ほら、あんたどんも頑張んね。坂根神楽までもう十日ねえつちやかい。花ちゃ

んは下絵を書いちみようか。千鶴さんも手え動かさんけ。那美江ちゃんもよ」

花 「はーい」

那美江 「了解」

千鶴 「わ、分かりました」

女たち、彫り物の作業を始める。

日出子 「(作業しながら) そう言えばよ、昨日も出たげなね」

千鶴 「はい?」

日出子 「あれよ。大次さんかい聞いたつちやけんよ、今度は干物工場ちや?」

千鶴 「干し場を荒らされたそうです」

日出子 「見張り立てちよつたのんねえ」

千鶴 「はい」

那美江 「(作業しながら) 干物工場だけじゃねえとよ。どこん家庭にでん入つちきち

かい、干物やら漬物やら食べちいくげなが」

千鶴 「最近では漁港で干してる網やロープにも噛り付いているようです」

那美江 「でーじゃねえ。被害総額何億円け?」

千鶴「億は行ってません。百二十万……」

日出国「困ったよねえ。そんなうちん、人間にも襲い掛かるっちゃないかね」

那美江「日出国奥さん、うち、うち」

日出国「あ、そうじゃったね」

那美江「ほんとん怖(こえ)かったあ。もうよ、いきなりよ、があっちゅって」

日出国「よう助かったね」

那美江「運が良かった。大きな声出したらびっくりして逃げ出しちったよ」

日出国「怪物んくせに、臆病やっちゃねえ」

千鶴「那美江さんが咬まれたのは、追い払おうとして手を出したからでしょ」

那美江「それがなんけ？」

千鶴「鮫だって熊だって、人間が何もしなければ襲ってはきませんよ」

那美江「なんけあんた、自業自得じゃっち言いてえと？」

千鶴「そうではなくて。怪物と決めつけるのはどうかと思うんです」

那美江「どんげして見てん怪物じゃろうが。千鶴さんやって姿みたやろ」

千鶴「ええ、まあ」

那美江「あれは怪物じゃが。化け物や。さっさと退治すればいいのん」

千鶴「どんな動物も危害を加えようとすれば咬みつきます」

那美江「こんまま放置してまた怪我人が出たら、千鶴さん責任持てっとけ？」

千鶴「そうならないように今日報告会を開いているのです」

那美江「夫婦揃って怪物ん味方け。言っちよくけん村んみんなは怪物退治に賛成よ。あ

んたどん夫婦と、所長だけやわ。共生か共存か知らんけん恰好つけくさっちかい」

千鶴「私たちは村の発展のために正式な手順ののっとしていくことを……」

日出国「もうやめんけ」

千鶴と那美江、黙る。

日出国「うったち村ん者だけぢ話し合ってん行き詰るかい調査会社ん調査員を雇ったっ

ちやる。あんたどんが言い争ってん、時間ん無駄やが」

千鶴「言い争ってるわけでは……」

日出国「もう決めたやろ。どんげな内容でん今日ん報告会で決まったこっつに従うち。駆

除か保護か。決定が下さるつまでは待つしかねえとよ」

花、彫り物の下絵を完成させる。

花「出来た」

日出国「(見て)花ちゃん、彫り物は何を描くか決まっちよつとよ。勝手なもん描いた

らいかんわ」

那美江「なんけ、ちよつとそん絵……」

千鶴「化け物……」

花の作った彫り物には奇妙な生き物の絵が描かれている。

■第一幕・二場■

公民館の会議室。

七生が先に来て、紙に目を注いでいる。

草野が来る。

草野「酒田先生。お早いですね」

七生「紙をさりげなくしまっ(あ、すみません、開いてたので勝手に)」

草野「どんげですか、調査ん方は」

七生「ああ、はい、皆さん協力して下さるのでとても助かります」

草野「先生んお人柄でしょう。初めんほうはみんな、警戒しちよりましたからね。野生動物ん調査員ちゆったら、どんげな変わり者が来るっちやるかっちゆってね。ま

ともで物腰ん丁寧な先生じゃったかい、安心しちよりますよ」

七生「そうですか……あの、いい所ですね、ここ」

草野「(照れる)いやあ。海と山しかないでしょう。退屈じゃないですか」

七生「二日間、調査がてら色々見て回りました。本当、素敵なお場所です」

草野「実は十日後、ブルーツーリズムを開催するんです。先生もいかったら」

七生「ブルーツーリズム？」

草野「都会ん方に漁村ん暮らしを体験して頂くイベントです。漁船で湾めぐりしたり、干物作ったり」

七生「ああ」

草野「目玉はね、坂根神楽とポンプン漁」

七生「ぼ？」

草野「坂根に伝わる伝統的な漁です。釜ん底を叩いち魚を網に追い込む」

七生「そんなのがあるんですね」

草野「一応予約は埋まっちよるんですけどね、先生なら喜んでご招待させて頂きます。

どうですか、先生？」

七生「あの、先生はちょっと。ただの調査員なんで」

草野「いやでも、元は獣医じゃったわけでしょう。坂根は漁村ですかい、あんまりお世話にならんですが、家畜獣医師っちゆったら、立派な先生です」

七生「それ、昔の話ですから」

小菅俊一が来る。

小菅「敦之、聞いたけ？ またやられたげなが」

草野「また？ 聞いちよらん。どこですか？」

小菅「岬ん研究所」

草野「ああ、あの老夫婦。干物ですか」

小菅「いや、大根ん漬物じゃわ。樽ごと全部」

草野「悪食じゃねえ」

七生「岬の研究所に人が住んでるんですか？ 無人の廃墟と聞きましたけど」

草野「ああ、いや、研究所側には小屋みたいな小っちゃえ家があるんです」

七生「漬物樽はどこに？」

小菅「そりゃあんた、家んならじゃわ」

須田大次が牟礼と連れ立ってくる。

大次「所長と会長は？」

草野「すみません、まだです」

大次「二人とも自覚ん欠くつな。(七生に)先生、今日はよろしくお願いします」

阿藤が駆け込んでくる。

阿藤「草野さん、大変大変！」

草野「ああ、所長、どんげしました？」

阿藤「おぼちゃんたちから聞いたんです。岬の研究所」

草野「ああ、はい、今、小菅先生かい」

阿藤「漬物を樽ごとだって？ よっぽどお腹が空いてたんだなあ。可哀そうに」

小菅「(咳払い)」

阿藤「あ、もちろん被害に遇われたご夫妻も可哀そうです。食べる方も食べられる方も、

みんな等しく可哀そう」

小菅「(鼻で嗤う)みんな等しく可哀そうね」

阿藤「なんですか？」

小菅「本気でそんげ思っっちゃっなら、とっとと駆除すべきでしょう。毎日ですよ。干物

やら畑が食い荒らされちよる」

阿藤「そういう人が動物かっていう短絡的なことでは、いけないと思うんです。オケラ

だってミミズだってアメンボだって、みんなみんな生きてるんだ、友達なんだ」

小菅「(遮る)敦之、始めちくんね」

草野「しかし会長はまだ……」

小菅「あん奴はおらんでんいいやろ」

草野「獣害対策委員会は行政ん長と自治組織ん長、二人揃っちかい行わんと」

小菅「先代人会長ならともかく、あん奴じゃねえ。おってんおらんでん変わらん」

大次「俊一、口を慎まんか」

小菅「村ん誰も、奴を会長やら思っっちゃらんわ」

大和がきて入口に立っている。

小菅だけが気づいていない。

小菅「そんげなこつ大次も分かっちゃっやろ。村の者みんな、お前んこつを実質的な

ふるさと会ん会長っちみなしちよる」

大次「やめんけ」

小菅「会社もふるさと会も、全部大次が仕切っちよる。お飾りん会長やら待つ必要ない

わ。さっさと始めち、こん村ん行く末を……」

小菅「大和に気づく。」

小菅「ああ、会長」

大次「大和、遅えぞ」

大和「いや、なんか天気いくてよ。ゆっくり歩いてきた」

草野「場をとりなす(全員集まったことやし、始めましょうか」

大次「まずは酒田先生ん報告からでいいとかえ？」

七生「あの、先生はちよつと」

草野「『酒田さん』、これでいいですか？」

七生「はい」

草野「それでは酒田さん、お願いしま……」

草野「阿藤が手を挙げていることに気づく。」

草野「どんげしました？」

阿藤「報告の前にちよつといいですか？」

草野「ああ、まあ、少しだけなら……なんででしょう？」

阿藤「(手帳を広げて読む)坂根集落支援センター所長の阿藤です。このたびは坂根地区で突如多発した野生動物による獣害対策の報告会にご参加いただき、まことにありがとうございます。大潮市役所の支所に代わる小規模な出先機関として集落支援センターが設置されて二年、大きな事故や事件に見舞われることもなくやってこられたのは一重に住民の皆様の理解とご協力のたまものです」

小菅「そんな挨拶は必要ですか？」

草野「(手帳をのぞき見し)ああ、これは後でいいかや」

阿藤「(泣きそう)」

草野「ああ、あの、そんならそうやね、来週ん坂根だよりに載せましょう。それまでとっておく。ね？」

阿藤「(まんざらでもない)それならいいかなあ」

草野「すみません、先生。あ、いや、酒田さん、報告をお願いします」

小菅「そん前に確認しちよきてえ。こちらん先生ん調査結果にみんな従う。それは分かっちよんな？」

阿藤「もちろんです」

小菅「それが例え、あんたら保護派ん望む結果じゃねえとしてもですよ」

大次「保護じゃねえ。共生じゃ」

小菅「どっちでん同じじゃ。駆除が妥当。そんげなつてん文句は言いなんなよ」

阿藤「分かっています。ただし正規の手順は踏んで頂きますよ。えっと、(手帳を見る)国の定めた野生動物保全基準、県の立てた鳥獣保護事業計画、市の作った被害対策フローチャート……」

小菅「(七生に)始めち下さい」

七生「ああ、はい、分かりました」

七生、一礼する。

七生「まず結論から述べますと、坂根集落での野生動物による被害は、野生動物保全基準における第二段階に相当します。よってその対策は行政組織を中心とした追い払い及び侵入防止策の実行。地域住民に対する被害防止策の普及啓蒙活動となります」

小菅「まさか」

草野「酒田さん、それはちよっと……」

阿藤「(草野に)ねえねえ、どういうこと？」

草野「駆除せんで村に入(い)るんなちいうこつです」

小菅「納得いかんわ」

大和「あの、ちよっといいけ？」

大次「なんけ？」

大和「そん保全基準ってなん？」

小菅「二日前、先生が説明しちくれたやろ」

大和「ごめん、聞いちよらんかった」

七生「昨年、環境省を中心に国が定めた基準のことです。人間と野生動物の関係性を四段階に分け、それぞれの段階での対応を明確に定義つけた。その方針に基づき都道府県は野生鳥獣保全事業計画をたて、市町村はその計画にそった野生動物の管理を行います。この基準を無視した場合、法令により罰則を受けることもある」

大次「先生が所属しちよる調査会社は動物による被害ん状況を調査しちかい、保全基準んどん段階にあるっかを診断しちくれつとよ」

大和「ああ、そういうこつけ」

小菅「(七生に)説明しちくんね」

草野「そ、そうですね。私はてつきり、第四段階か、せめて第三段階やと思つちよった」

阿藤「(手帳を見て)第三段階は『人間の生活圏に対する動物の執着』」

草野「対応は『放獣を前提にした捕獲』」

小菅「あんやつらはここ一か月ん間にほぼ毎晩現れちよる。これを執着ち言わんでなんち呼ぶんですか？」

七生「第三段階が適応されるのは、行政による効果的な追い払いと侵入防止策が施されていることが前提になります。しかし坂根では……」

大次「集落支援センターは通さんで、住民が各自対策を施しちよった」

七生「その上、庭で干物を作つたり、漬物樽を家の外に置くなど、集落自体の餌場価値を下げる努力をしていません。よって第三段階は適応されないのです」

草野「思わず怒鳴る(うちん妻は……)」

七生「!」

草野「手を咬まれました。これは第四段階にあたらんのですか？ あたるでしょう？」

阿藤「(手帳を見る)第四段階……『野生動物による人への危害』」

草野「対応は『安楽死処分』。つまり駆除じゃ」

七生「首を横にふる(残念ですが)」

草野「なんで？ 今も痛みがよっですよ」

七生「奥さんからお話を伺いました。奥さんが咬みつかれたのは、奥さんから先に手を出したから。この場合、動物による攻撃は危害ではなく反撃とみなされます」

草野「そんな……」

七生「したがって坂根集落が置かれている状況は第二段階と判断されます」

阿藤「(手帳を読む)『人の生活圏内への野生動物の出没』」

七生「対応は、先ほど申し上げた通りです」

阿藤「村に入らないようにするんですね。(全員)よし、みんな頑張りましょう」

小菅「駆除やろ、普通」

大次「俊一、調査結果に従え。敦之もじゃ」

草野「……」

大和「あ、ねえねえ、俺と宇いっちゃんは何視？」

大次「大和も、牟礼のおっさんも、いいね？」

牟礼「(無言)」

大和「まあ、俺はどっちでもいいけんねえ」

大次「(全員に)先生には被害状況ん診断んほかに、被害対策ん計画立案を依頼しちよる。

そちらについてん今、お聞かせ頂けますか？」

七生「あ、はい。大枠であれば。ただ……実は一つ、大事なことが分かっていないんです。この村に現れている動物はいったい何ですか？」

大次、答えない。

沈黙。

七生「……この村に来て二日、被害現場の調査や聞き込みを行いました。しかし出没する野生動物についてだけ手がかりが得られないんです。誰に聞いても暗かったから姿が見えなかったと答える。これはなぜですか？」

大次「先生、申し訳ねえけん、対策方法だけを教えて頂くこつはできませんか？」

七生「野生動物の追い払いや侵入防止は、生態によって異なってきます。侵入防止の電気柵一つとっても、猿と猪では違ったものを用意しなくてはならない」

阿藤「どんな動物にも効く方法はないんですか？ 万能電気柵とか」

小菅「ほんとう分からんとよ。夜行性で暗くなっちかいしか現れん。しかも素早え」

草野「何度か捕獲も試みたつとですが、あっちゅう間に逃げられちしまつて」

七生「であれば、定点カメラを設置して姿を撮影しましょう。幸いこの二日間の調査で

侵入経路は分かっています」

大次「……狸」

七生「はい？」

大次「狸なんです。みんなはつきりとは見ちよりませんが」

草野「ああ、そうですね。うちの妻も狸んごつあったち話しちよりました」

小菅「そう言われちみっと、狸ん咬まれた傷ん似ちよったな」

阿藤「え、狸なの？」

七生、無言でビニル袋を取り出す。

七生「(大次に)須田さん、昨日あなたの干物工場で拾いました」

大次、無言で受け取る。

阿藤、小菅、草野も覗き込む。

七生「野生動物による被害の場合、現場には必ず何かしらの痕跡が残っています。足跡、糞、体毛。しかしどの現場にもそれらしきものはなかった。まるで丁寧に掃除をした後のように綺麗だった。それが唯一手に入れられた手がかりです」

大和「何を見つけたと？」

七生「鱗です」

阿藤「干物工場なら魚の鱗くらい……」

七生「拾ったのは干し場です。鱗、とりますよね、干す前に。それにその大きさ。鱗一つがそれくらいあるなら、体長は二メートルに迫る。そんな巨大な魚が干し場に
いるんですか？」

大和、大次たちに近寄り、ビニル袋を取り上げる。

大和「ああ、だめじゃが、大次叔父さん。これはもう誤魔化せん。こんげでけえ鱗を持つた魚、干物にせんじゃろ」

大次「大和、黙らんか」

大和「もう隠すのやめようや」

大次「気まぐれぢものを言ううな」

大和「こん人なら大丈夫じゃって」

大次「うるせえ！」

大和「……なんけ、俺、一応ふるさと会の会長やっちゃけど」

大次「じゃったらなおさら……(話せない事情が)分かっちゃろ」

七生「……先ほど、誰に聞いても暗くて姿が見えなかったと答えたと言いました。でも一人だけ、何を見たのか、はつきり教えてくれた人がいたんです」
全員が緊張して七生を見る。

七生「その人は丁寧に絵まで描いてくれた。でも僕には信じられなかった」

七生、冒頭で見ていた紙を広げる。

足の生えた魚の絵が描かれている。

七生「初めはからかわれているのかと思いました。魚にトカゲのような足が生えている」
小菅「誰がそんなげな……」

七生「名前は明かせません。ただその人ははっきりと証言しています。足の生えた魚が村を侵していると。これは作り話なんですか？ それとも……」

大次「……敦之、写真」

草野「いいとですか？」

大次「うちん会長はいいっちゅっちよる」

草野「(阿藤を見る)」

阿藤「え、あ、どうしよう、いいのかな？」

草野「所長が決むっこつです」

阿藤「そうだよ。うん、じゃあ、そうだな、お見せして」

草野、無言で資料ファイルから写真を取り出し、七生に渡す。
受け取る七生。

草野「それらは数日前、撮影しました。目が光っちゃうのは光を反射してでしょう」

七生「(写真を見て目を疑う)……これ、冗談とかではないですよね？」

草野「はい」

七生「アロワナ？ いや違う、ピラルクの方が近い。こちらはハイギョ？ こっちはまるでシーラカンスだ。これみんな、古代魚のようですが」

阿藤「コダイギョ？」

七生「太古の昔からほぼ姿を変えずに生きている魚たちです。いわゆる生きた化石。でもこれ、みんな足が生えている」

大次「初めはオオサンショウウオの亜種かち思ったっちゃけんね」

七生「(写真を調べながら)オオサンショウウオには鱗がない」

大次「じゃかい僕はイクチオステガン可能性を疑った」

阿藤「イク……何？」

七生「イクチオステガ。三億六〇〇万年前、海から上陸した生物です。それが地球上のどこかでひっそりと生息し、今この村に現れたと？」

大次「冗談みてえな話やる？」

七生「でももし本当にそうなら、野生動物の保全どころではない。世紀の大発見です。すぐにでもこの魚たちを保護しないと……」

小菅「バカなこつ言わんじよってください」

大次「俊」

小菅「こん姿見てんまだそんなげなこつ。あんた正気ですか？ これは化け物やとですよ。怪物、モンスター。足ん生えた巨大な魚が夜な夜な海かいやっちきては村を荒らしていく。まるで陳腐な昔話じゃ。昔話ならどうします？ 退治すっでしよう？」

大次「昔話ならな。じゃけん僕たちは現代に生きちよる。今んルールん中ぢ生くっしか

ねえっちゃ」

七生「この生物の習性および性質について、十分な調査は行われたんですか？」

大次「もちろんまだです」

七生「状況が第二段階にあるならば、調査すべきです」

草野「しかし怪物なんですよ。何をしでかすっか分からん」

七生「未知の生物というだけです。調査して危険がないとわかれば共生だって可能です」

草野「私ん妻は咬まれちよる。反撃じゃろうとそん事實は変わりません。人間を咬む可能性んある生物が村ん中をのさばちちよる。そんだけで十分退治すっ理由になりませんか？」

大次「ならん。今こん段階で殺せば法に触(ふ)るっ」

草野「法的にはそうかもしれん。じゃけん現実にこん村は被害にあちちよつとです」

阿藤「でも殺さなくていいんじやないかなあ？ そうだ、先生、第三段階に引き上げられませんか？ 捕まえて、人の住んでいない場所に逃がしてあげる」

小菅「捕まえられんかいこんげな話になちちよつとでしようが」

草野「化け物は日に日に数を増しちよります。どれくらい増(ふ)うっかも分からん。じやかい数ん少ねえ今んうちに駆除しちいけば……」

阿藤「可哀そうですよ、お魚が」

草野「あなたは、村ん者の生活より、化け物ん方が不憫じゃちちゅーとですか？」

阿藤「ああ、いや、そうじゃなくて」

牟礼「調査員ん先生」

牟礼がぼつりぼつり話し始める。

牟礼「わしらん村は町から遠い。海に漁にも出らんといかん。都会ぢ暮らすあんたには想像つかんかもしれんけん、食うもの全部買うちちゅー暮らしは大変じやとです。じやき自分たちん食う分だけ干物作ったり畑でとったりする。それをみんな、化け物に食わるる。人間が生くつかあいつらが生くつかの境です。化け物助けて人間が死ぬるちちゅーのは、わしには納得いきません」

阿藤「なんでそういう話になちちやうのかなあ。このお魚もかけがえのない命なんですよ。なんていうの、ほら……(閃く)地球は一つ!!」

大次「(遮る)俊一も牟礼のおっさんも、言いてえこつはよく分かる。じゃけん今、生物多様性ちちゅーこつが大きな問題になちちよるちちや。人間にとつて害んある生物じやから根絶する。そんげな理屈ん通る時代じゃねえなった」

大和「それは、そうじゃちちやろけど」

大次「なんか」

大和「納得させんと。なんちちゅーちやるか、心を？」

草野「理屈は分かるとです。でも恐い。腹も立つ。毎日ん暮らしが脅かさるる。それだけじゃねえ。十日後にはブルーツリーリズムをやるとです。坂根んよさを大勢ん人

に知ってもらえるチャンスなんです。村ん未来がかかっちゃよる。それなのに人間を襲う怪物が住んじよるやらしい話が広まったら、誰も寄り付かんっちゃしまう」

小菅「(七生に)保護にしろ駆除にしろ、化け物ん存在は村ん外には知られんようにしよう。それが先生を呼ぶにあたって我々人間ち決めたこつです」

大和「俺は無理じゃち思っちゃったよ」

牟礼「突然七生に向かって土下座する。」

七生「(驚く)ちよつと、牟礼さん、なんですか、いきなり」

牟礼「お願いします。この件、ねかったこつにして下さい」

七生「ちよつと、頭を上げて下さい」

牟礼「むしろ、国ん方針やら県ん計画やら信じられんとです。そんなこつは口蹄疫ん時に嫌っちゃゆうほど思い知らされた。国ん委ねたら最後、滅びん道を行くこつになる。そんなこつになったら、先代ん会長さんに申し訳が立たんとです」

草野もまた土下座する。

草野「行政に携わっ者としてこんげなこつ頼むんは間違っちゃよるち分かっちゃよります。

そこを曲げちお願いします。どうか、駆除さしち下さい」

七生「草野さんまで……」

草野「私は二年前、口蹄疫災害ん時、大潮市役所ん農林課におりました。そこで防疫に携わった。そんな時に味わったこつん全部が忘れられんとです。国ん対応は本当に酷えもんでした。農林大臣は対策本部を設置しただけ。あとは何も指示せんので外国へ行つて一切ん責任かい逃げ出した。国会ち宮崎ん窮状を訴えた議員さんは政府与党かい『そんなに金がほしいのか』ち罵らるる。首相は『宮崎を本気でどうにかする』ち宣言した翌日に辞任。国ん不始末は隠されち、口蹄疫災害はもう終わったこつ報じられた。今もまだ血を吐く思いで苦しむ者がおるちゆうのに」

牟礼「国ん方針に従えば、むしろん暮らしは踏みにじらるる。人間よりも化け物ん方が大事じゃちゅって、村は犠牲を強いらるる」

阿藤「そんなことありませんよ。国は思うよりもずっと、国民のことを考えてます。環境省から左遷された僕が保障します。国は国民の皆様の味方という意識で……」

大和「(阿藤の腕を抑えて)ちよい黙ろうか」

七生、牟礼と草野をじつと見つめる。

七生「簡単に駆除とおっしゃいますが、何をするのか分かっていますか？」

草野「……大型動物ん場合は銃や刃物による止め刺し。中型動物は頭部強打か麻酔ガス」

七生「口蹄疫の際、三〇万頭の牛が安楽死処分されました。十人がかりで牛を抑えて、首の静脈に素早く注射針を打ち込む。薬液を注入した次の瞬間、それまで暴れていた牛が、どろっと大きな音を立てて地面に崩れ落ちる。目は見開かれたまま」

草野、はっとして七生を見る。

七生「小菅に目撃情報から見積もって、この村に夜訪れる魚の数はおよそ二〇頭。もしかしたらもっと増えるかもしれません。魚の存在を外部から隠すつもりなら、この村の人々が駆除に従事することになります。出来ますか」

小菅「一瞬ひるむが、あ、ああ、出来(く)っね」

七生「ここにいる皆さんはまだお若い。しかし坂根集落の人口の八割は六十五歳以上の高齢者です。彼らとともに、生態の分かっている生物を取り押さえ、効果的な方法も分からないまま殺すんですか」

小菅「……」

七生「魚の死体はどうしますか？ 焼けば煙が立ち上る。この村で異変があったことを周辺地域に知らせることにしますよ。埋めるとしたら埋却地の候補はありますか？ あったとして、周辺住民の合意は得られますか？」

小菅「それはやっちみらんと……」

七生「責めているわけではありません。駆除するにもそれなりの準備が必要なのです。

草野さんなら分かりますよね」

草野「……はい」

七生「僕の仕事は被害状況を調査し、段階に応じた対策方法を提案することです。(大次に)須田さん、その「提案をさせて下さい」

大次「出来(く)っことですか？」

七生「はい」

小菅「あなたさつき、未知ん生物じゃちゅったじゃんけ。生態も分からんのに、どんげやって追い払うちゅーつか」

七生「この写真をご覧ください」

七生、足の生えた魚の写真を見せる。

七生「鼻先を地面にこすり付けています。シーラカンスが餌となる生き物を探すときの行動とよく似ている」

小菅「それが何です？」

七生「シーラカンスの鼻先にはロストラルオーガンと呼ばれる電気受容器があります。

この器官で生物が発する微弱な電気を感じし、餌を見つけ出す。シーラカンスだけではありません。鮫もロレンチーニ瓶という似たような器官を持っています。

電気に敏感ということは、電気刺激に弱いということ。その性質を利用した鮫除けの装置も発明されている」

大次「足ん生えた魚にも、電気受容器があるち？」

七生「可能性はあります」

阿藤「もしあれば、鮫除けや電気柵が効くかもしれませんね？ (草野に)そういうことですよね？」

七生「未知の生物でも写真一枚からこれだけの推理が可能です。僕たちは怪物と渡り合

うことが出来る。化け物と呼んで恐れることはないんです」

七生、草野と牟礼を対する。

七生「僕は二年前、家畜獣医師として口蹄疫ワクチンの接種に携わりました。一日に五〇〇頭の牛を安楽死……殺したんです。初めのうちは殺される牛や、牛飼いの方たちのことを思って僕もつらかった。でもね、ある日を境に作業になるんです。早く終わらせないと。そう思って機械的に殺していく。駆除ってそういうことですよ。今はまだ第二段階です。もう少しあがきませんか？」

草野・牟礼「……」

小菅「お、俺は反対じゃ。いいですか。俺は反対です。(みんなに)反対したかいね！」

小菅、出ていく。

大次「俊ー！」

大和「いいが、放つちよけば。だいたいよ、俊一ちゃんじゃが。先生ん調査結果には従えっちゅったの」

大次「あいつは医者じゃ。年寄り連中に影響力がある。敵ん回すとてにやわんわ」

七生「住民説明会を開きましょう。もう少し魚について調べてみます。その調査結果とともに対策案を説明し、坂根の住民皆さんの理解と協力を仰ぐんです」

大次「住民会ん日取りはいつ？」

草野「早え方がいいでしょうね」

七生「これから定点カメラを設置します。合わせて出没地点で見張りをし、目視による生態調査を行います。その分析を明日の日中至急行うとして……」

草野「明日ん夜でどんげです？」

大次「早えすぎんか？ まとまった調査結果が得らるっとは思えん」

七生「今夜中に出来る限りのことを試みましょう。目撃情報を分析し、魚に効果のありそうな追い払い方法、侵入防止策の仮説を立てる。出来れば実験も……」

牟礼「ぼんぼん漁」

七生「？」

牟礼「村に伝わる古い漁です。これ、使えませんか？」

大次「今話しよるのは化け物を追い払う方法じゃ。捕まうっちゃねえ」

七生「いや、試みましょう。魚は一〇〇ヘルツの音を嫌います。ぼんぼん漁がその原理を応用している可能性はある。深夜に行くことになるので近隣住民に説明を」

草野「分かりました」

牟礼「釜はわしが手配しましょう」

七生「お願いします」

草野と牟礼、出ていく。

阿藤「(七生に)なんとかかなりそつですわね」

七生「僕はカメラを設置してきます」

行きかける七生を大次が呼び止める。

大次「先生」

七生「先生というのはやめてく……」

振り返る七生。

大次がお辞儀をしている。

七生「須田さん？」

大次「このたびは、本当にありがとうございます」

七生「いや、まだ始まったばかりですから」

大次「宮崎に都井岬っちゅう場所があつのはご存じですか？」

七生「え？ ああ、はい。名前だけは」

大次「そこん野馬っちゅう野生ん馬が棲んじよります。鮮やかな緑ん草地と、黒え輝く海を背に、野馬が駆くつ姿はとても美しい」

大次、頭を上げる。

大次「夜訪るる怪物が、イクチオステガかもしれん。そんげ思った時、僕は感動と興奮に震えました。絶滅したはずん太古ん生物が、こんげなんの取り柄もねえ漁村に現れた」

七生「……」

大次「もしこん村に、正体不明ん怪物じゃねえして、三億六〇〇〇万年前ん生きた化石が棲んじよるとしたら、観光客は来てくれますかね？」

七生「……危険がないと保証されれば」

大次「そうですか……報告会ん結果を村ん者に知らせちきます。所長、あんたも」

阿藤「はい！」

大次「(大和に)お前もじゃが」

大和「はい」

大次、大和と阿藤を連れ立って出ていく。

七生、足の生えた魚を描いた絵に目をやり、それから部屋を出ていく。

■第二幕・一場（一週間前）■

神楽宿、夜。

女たちが坂根神楽の練習をしている。

舞う花。海の役を演じる日生子、千鶴、那美江。

順調に見えるが花が調子を崩す。

千鶴、神楽を止める。

千鶴「ちよつと花ちゃん、もう何回目？ 本番まであと一週間しかないんですよ」

花「（遠くの音に耳を澄ませている）」

千鶴「花ちゃん」

花「ああ、ごめん」

千鶴「主役なんだから。自覚を持って」

日生子「少し休ませちあげようや？」

千鶴「夫たちがイクチオステガの対策に走り回っているんです。私たちも頑張らないと」

那美江「（手を押さえて）いたたあ、手え痛え。休憩、休憩」

日生子「ね？」

千鶴「もう……。それじゃ五分だけ」

那美江「ひゃっほほーい！」

那美江、日生子、せんべいなど出してお茶の準備を始める。

花、何かの気配にひかれるように戸口の前に立つ。

日生子「やっぱ楽しいねえ」

千鶴「はい？」

日生子「お神楽。色々あってやめちよつたけん、ねえと寂しい、物足りん」

那美江「先代会長にも見せてかったねえ」

千鶴「坂根神楽の復活に、一番ご熱心でしたからね」

日生子「うちん人は、神楽が好きやったっちゃねえ（ない）。神楽をやっちよる女どんの

姿見るんが好きやったとよ」

千鶴「珍しいですよ、女性中心の神楽って」

日生子「うちん人は毎年、一番前に陣取って目え見開いち見よつたわ」

那美江「うちん人もそうじゃった。あん時はまだ高校生やったかね。うっとりした顔し

ち主役に見とれよつたわ」

日生子「大次さんも牟礼んとこん宇一郎も俊一くんも、みんな、そう」

那美江「大和くんやら毎回鼻血出しよつたですわね」

千鶴「綺麗な人だったんですね、主役の方」

那美江「花ちゃんのお母さん」

千鶴「そうなんですか？」

日生子「東の須田家、西の比嘉野家うち張り合いよつたけど、神楽ん時だけは村中み

んな、比嘉野家ん涼子さん味方じゃったわ」

那美江「せんなって、もう十五年かあ」

千鶴「どうしてやめたんです？」

那美江「そりゃあんた、涼子さんがおらんくなつたかい」

千鶴「いなくなつた？ 花ちゃんのお母さんが？」

日生子「(話を逸らせる) 那美江さん、それ、山椒の木？」

と、那美江の傍らにある木の皮の束を指さす。

那美江「ああ、これ、お守りです」

日生子「(木の皮の束をとり) こん木から魚採る時ん毒を作るとよね」

千鶴「あなたまさか、まだイクチオステガを怪物扱いしてるんですか？」

那美江「(せんべいをものす) い勢いでかじる」

千鶴「住民説明会で酒田先生言つてたでしょう。私たちが正しく接すれば、イクチオステガと安心して共に暮らすことが出来る」

那美江「安心やら出来ん。みんなそう思つちよるよ。年寄り連中やら家に閉じこもつちかい出てこんもん。だあれも、先生ん言うこつやら腹ん底では信じちよらん」

千鶴「岬のご夫妻を見て下さい。イクチオステガのことを正しく理解して、冷静に行動してますよ」

那美江「あん二人はよそ者やもん。いよいよちゆう時は村から逃げ出せばいい。そりゃ平気やろ」

日生子「二人とも、しっ」

戸に何かがぶつかると不気味な音が聞こえる。

千鶴「なんです？」

花「……魚」

音が大きくなる。

何頭かの動物が戸に頭を打ち付けているような音。

千鶴と那美江、思わず日生子にしがみつく。

日生子「電気柵ん向こうに全部追ひ払つたつちやねかつたど？」

那美江「(木の皮の束を取り出し振り回す) うつたちゃんこと食いに来たつちや」

千鶴「(怯えているが) 大丈夫です、イクチオステガは人を襲いません」

戸を揺する音がさらに激しくなる。

那美江と千鶴、悲鳴を上げる。

花、戸口に向かって手を差し伸べる。

と、大次をはじめ男たちの声と、釜の底を棒で叩く音が聞こえてくる。

大次の「後ろん回り込め！ 追え」の連呼と釜叩きの音。

千鶴「(気づく) 大次さん？ (声援を送る) 大次さん！ 大次さん！」

やがて遠ざかる声と音。

千鶴「(日出处子たちに) もう大丈夫です。イクチオステガは私の夫が安全な場所に追い
払いました」

那美江、出て行くこうとする。

千鶴「どこ行くんです?」

那美江「化け物対策委員会。やっぱし保護は納得いかん。村ん誰かが食べらるっ前に退
治すべきやわ」

千鶴「だからイクチオ……」

那美江「あれはただん魚じゃねえ。村んみんな言いゆるわ。あんた聞いちやらんと?」

千鶴「馬鹿馬鹿しいデマなら耳にしました」

那美江「デマじゃねえ。隠された真実よ」

千鶴「役人の妻が噂話に振り回されてどうするんですか?」

那美江「三年ぼっちしか村におらん半分よそ者に何が分かつと」

千鶴「先代会長のおっしゃった通りですね。理解出来ないものは取り除く。新しいもの
は村に入れない。だからこの村は行き詰ったんですよ!」

那美江「なんけ、偉そうに!」

千鶴「大次さんと私は、先代会長からこの村の未来を託されました。貴重な野生動物を
怪物扱いする。そのような考え方を今改めない限り、この村は確実に滅びます」

那美江「こん村はうったちん村じゃ! よそ者が余計な口出しすんな!」

千鶴「あなたたちが冷静にものごとを見られないからでしょう!」

日出处子「やめんけ!」

日出处子、千鶴と那美江の尻を叩く。

日出处子「坂根神楽まで一週間とよ。喧嘩してどうすつと」

千鶴「私は正論を述べたまでです」

那美江、木の皮を携えて出て行くこうとする。

日出处子「那美江ちゃん!」

那美江「奥さん、止めんじよって下さい。もう、よそ者の手は借りん。うちはうちん手
で村を守ります」

出て行く那美江。

日出处子「もう!」

千鶴「ああ、もう、練習しましょう。練習! 花ちゃんも、ほら」

花「本当にやつと?」

千鶴「はい?」

花「やったら魚が帰っちくんよ」

花、何かを待つように立つ。

■第二幕・二場■

公民館、夜。

阿藤が一人手帳を読みながらスピーチの内容を練っている。

阿藤「手帳を読む」『坂根は人口三五〇人。三方を山に囲まれ、西ヶ浦、魚見浜、蛭子ヶ浜の美しい三つの浜辺を擁した自然の恵み豊かな漁村です』

大和がくる。

阿藤、気づかない。

阿藤「言い換える」『美しい海を擁した小さな漁村です。恵み豊かな自然と、暖かい人々との交流』……『暖かい人々とのスキンシップ』……『触り合い』

大和「『ふれあい』」

阿藤「気づく」え？ あ、会長……見てたんですか？ いつから？」

大和「今来たところ。それ、あれ？ ブルーツーリズムの？」

阿藤「あ、はい。開催の挨拶。あの、今、すごくいい言葉を。なんでしたっけ、『スキンシップ』？」

大和「『ふれあい』ね」

阿藤「『坂根は人口三五〇人。三方を山に囲まれ、南には美しい海を擁した小さな漁村です。恵み豊かな自然と暖かい人々とのふれあいを、ぜひお楽しみ下さい』」

大和「いいっちゃねえ？」

阿藤「嬉しい」あの、絵も」

大和「なん？」

阿藤「絵も描いたんです。ポスターに」

大和「ああ、そう。見せて」

阿藤「学生の頃、美術部だったんで（と絵を見せる）」

大和「あ、いいね、キュウリとナス」

阿藤「人間と、足の生えた魚です」

大和「え？ あ？ そうやと？（と見直す）」

阿藤「さっき、浜辺を見てきました。電気柵越しに暗闇が広がって、その中に足の生えた魚たちの目が星のように煌めいている」

大和「俺、それ怖ええっちゃけど」

阿藤「怖くなんてありませんよ。ガラパゴス諸島のイグアナやコモド島のオオトカゲ。

人間は怪物みたいな生き物と一緒に暮らすことが出来ます」

大和「そうかえ……」

七生、大次、メモと地図を抱えた草野がくる。

七生「坂根神社境内に潜んでいた足の生えた魚二頭を電気柵の向こうへ封じ込めました。

これで集落内に棲みついていて二十四頭、全ての追い払いが完了です」

阿藤「本当ですか？」

大次「第一目標達成じゃ」

阿藤「すごい、こんなに早く」

草野、地図を広げてメモに書かれた数字を書き込んでいく。

大和「(見て) これは何が書かれよつと?」

大次「イクチオステガの頭数」

大和「とうすう?」

七生「足の生えた魚は毎晩、海から上陸しています。数が増えている。集落内からの追
い払いと並行して、頭数把握を行っていました」

阿藤「(書き込みを見て) 西ヶ浦、五十二頭……魚見浜、三十七頭、蛭子ヶ浜……八十
二頭?」

大和「そんげもおつとけ?」

草野「あわせて一七一」

大和「ちよつと多くねえけ?」

阿藤「大丈夫ですよ? 数に任せて電気柵を押し倒したりとか」

大次「イクチオステガは学習能力が高え。電気柵ん電気刺激を一度でん受けたら、二度
と近づつこたあねえ」

阿藤「でも……」

七生「確かに、住民説明会で発表した数の八倍ですからね。絶対に安全とは言い切れま
せん。柵の側に土嚢を積み上げましょう」

草野「住民へん説明はどんげしまししょう?」

大和「いいわ、どうせ家に引きこもつちよつちやし。見らんやろ」

草野「じゃけん、電気柵が効かんかい土嚢を積んじよる。そんげして誤解されんです
か?」

七生「現在の頭数を報告し、補強であることを理解して頂けるよう説明すべきです」

大和「やめちよきねよ。村中に二十頭おっただけで、家ん中ん閉じこもつて出らんくな
つとよ。百何匹もおつとか知つたら、どんげなパニックが起くつか」

阿藤「確かに」

大和「イクなんとかつちは、昼間はどっかん隠れちよつちやろ?」

七生「はい」

大和「じゃつたらやっぱ言わん方がいいよ、数字」

阿藤「そうですね。変に不安をあおることになりかねません」

七生「足の生えた魚は非常に大人しい性質をしています。けして自分たちから人間に襲
い掛かたりしません。そのことを理解した上でなら、一七一匹という数も、決
して脅威ではないはずですよ」

大和「じゃき、無理やって、こん村ん連中にそんげいうの」

大次「それんついては僕も同感じゃ。数字ん意味を理解でくつとは思えん」

七生「怖れるにしても、正確に、正しく怖れるべきです」

阿藤「教えないでおきましょう。そんなに対した問題でもないし」

七生「しかし……」

大次「第一目標は達成しました。速やかに第二目標へ移ることでイクチオステガは村人にとって安全な生物になる。今いらんパニックを起こす必要はありません。(草野に) 敦之、土囊ん手配。牟礼んおっさんにも伝達」

草野「……わかりました」

出ていく草野。

阿藤「これでもう安心ですね。(七生に) 次のステップへ進みましょう！」

七生「……」

阿藤「(手帳を見る) 第二目標は『出没原因の究明』」

大次「魚たちはなんでこん村に現るっとか。そんな理由を突き止むる」

大和「理由ねえ。化け物の考えちよっこつやら分かつ？」

大次「化け物じゃねえ、イクチオステガや」

大和「どっちでん同じやろ」

阿藤「まず先生のお話を聞きましょう。先生、お願いします」

七生「……はじめに皆さんに理解して頂きたいのは、『出没原因の究明』と『誘引物の

除去』は同じだということです」

阿藤「ええ、なに、いきなり付いていけない」

七生「坂根における人間と足の生えた魚の関係が、野生動物保全基準の第二段階にある
ということ覚えていきますね」

阿藤「(手帳を見て) はい」

七生「人の生活圏内への野生動物の出没」という段階に対し、『追い払いの徹底と誘引物の除去』という対策が、国によって定められています。そこで僕は、坂根地区野生動物被害対策計画を作成するにあたり、対応のうち『追い払い』を第一目標に、『誘引物の除去』を第二目標に定めました……(阿藤に) 大丈夫ですか？」

阿藤「ごめんなさい、完全に迷子」

七生「簡単に言うと、魚を追い払い、村に誘う原因を取り除く」

大和「『ゆういんぶつ』ってゆうのはそんな原因のこつけ？」

七生「はい。たとえば猿や猪の場合、畑の作物、柿や栗の木が誘引物になります」

大和「じゃあこん村やと干物とか？」

阿藤「(手帳を見て) でも報告によると、他にも色々食べてますよ。漬物、網、材木、鶏」

大和「(茶化す) あと人間ね」

大次「黙っちゃよけ」

七生「僕は食べ物誘引物だとは考えていません。宮崎の海は豊かです。食べ物だけを
求めるのなら、わざわざ上陸する必要がない。それに、先日、近隣の市町村にそ

れとなく問い合わせてみました。あの魚たちはこの村にしか上陸していません」

大次「つまり坂根ゆえの理由があると」

阿藤「ミュータントだ」

七生「はい？」

阿藤「原発事故で、海に捨てられてますよね、汚染水。それを飲んだお魚を他のお魚が食べた。そのお魚をさらに他のお魚が食べていく。そうして、体の中で放射能が濃くなってって足が生えた。(手帳を見て)放射性物質は遺伝子に影響する。何かのほずみでお魚が先祖返りした可能性はありませんか？」

大和「なら岬ん研究所ん方が断然怪しくね？」

大次「大和、その話は(よせ)」

大和「いつかは先生ん耳にも入るって。村中みんな噂しゅっもん」

七生「なんですか？」

大次「くだらん噂話です」

七生「参考になるかもしれない」

大和「あん研究所で二年前、毒殺事件があったとよ」

七生「え？」

大和「汐留教授っちゅう研究所ん所長がよ、研究員全員に毒を盛ったと。そんで自分も毒を飲んで自殺。けっこう話題になったっちゃけん。知らん？ S村の集団毒殺事件。事件んあと、噂が流れちね。汐留教授はウイルスん実験をしちよって、うっかり口蹄疫ウイルスを漏らしちしまった。良心ん呵責に耐えられなくなった教授は研究員たちと心中した」

大次「不謹慎なデマじゃわ。教授はホヤん研究をしよった。ウイルスじゃねえ」

大和「ホヤじゃねえよ。ホヤを使っち遺伝子ん研究をしよったっちゃ。じゃかい、今は

こんげな噂話が広まっちゃよと。汐留教授は遺伝子操作ぢ生み出した危険な怪物を逃がしちしまった」

大次「くだらん」

大和「でも筋は通っちゃよ」

大次「誰が信じとけ、そんげな話」

大和「信じちよって、みんな。自然災害が起きてん、地震兵器で攻撃されたやらいう話が真実味を持つっちゃ。こん話やって十分に現実的やろ。違う？」

大次「そうじゃとして、なんでイクチオステガはこん村に現るる」

大和「鮭と同じやっちゃない？ 生まれた土地に帰っちくる」

大次「じゃき、なんで？」

大和「いや、じゃかい……(思いつかない)」

七生「魚が特定の場所へ向かう理由は大きく二つに分けられます。食べるためか、殖えるため。先ほど言ったように、あの魚たちは食べる」ことが目的で上陸しているの

ではありません」

阿藤「そうすると……」

大次「目的は繁殖、ちゅうこつですか」

阿藤「でも、卵なんてどこでも産めますよ」

七生「鮭は卵を産むために、長い旅の果て生まれた川に帰ります。うなぎもある特定の場所ですか卵を産まない」

大次「つまりあん魚たちにとって、こん村は卵を産む場所やち？」

大和「じゃとしたらどんげしようもねくね？」

全員、大和を見る。

大和「だってそうやん。餌を求めちよんなら、食い物をやらんければいい。じゃけん殖うっこつが目的なら、手ん打ちようがねえじゃろ」

阿藤「交尾も産卵も、場所さえあればどこでも出来ますからね」

七生「理由と原因は分けて考えて下さい」

大和「？」

七生「鮭はなぜ生まれた川に帰るのか。理由は交尾と産卵です。では鮭は何に誘われてその川に帰るのか」

大和「ああ、なんじゃろねえ」

大次「生まれた川ん匂いをたどっちゃ」

七生「そうです。川の匂いが鮭を誘い寄せる。つまり川の匂いこそが鮭が川に現れる原因、誘引物なのです。鮭だけではありません。サンショウウオは月の光に含まれた紫外線を頼りに海へ向かう。動物は行動する際、必ず何かに導かれる」

阿藤「それじゃ、あのお魚たちも何かに導かれている。そういうことですか？」

七生「魚たちをこの村へ導くもの、誘引物を特定すれば、村に寄せ付けないだけではない。利用して、人間と共生が可能な場所に誘導出来るかもしれない」

阿藤「(手帳を見て)そうしたら三つ目の目標も達成出来ますね」

大和「三つ目っちなんやっただけ？」

阿藤「(手帳を見て)お魚と……イクチオステガと共に生きる」

突然、激しく釜を乱打する音が聞こえる。

大和「なんけ？」

牟礼が飛び込んでくる。

七生「牟礼さん？ どうしました？」

牟礼「電気柵が破られた」

大次「なんちや」

牟礼「柵ん側に集まっちゃった魚どんが一齐に村んなだれこんで」

七生、飛び出る。

続く大次、牟礼。

おろおろする阿藤。

阿藤「行ったほうがいいのかな？」

大和「行ってん、なんの役にも立たんて」

阿藤「でも……」

大和「あんね、こんげなこつ言いたくねえっちゃけど。俺もあんたも、村ん連中かいバカにされちよつと。知つちよつた？」

阿藤「ああ、はい」

大和「ふるさと会は大次叔父さんが仕切つちよる。集落支援センターは敦之ちゃんが回しちよる。そうやろ。俺たちは何もせんでんいいと」

阿藤「あの、でも、優秀な人間がトップにいれば、みんな幸せになるとは限りません。上に立つものがダメだからこそ、組織が保たれることもある」

大和「ま、前向き……」

阿藤「それに僕、坂根が好きなんです」

大和「いや、うん、それで？」

阿藤「中央省庁では、頭がすくくいいのに、気持ちのない人がたくさんいました。僕はその逆でいたい」

大和「……」

阿藤「頭のいい人はお金で雇えます。でも、気持ちの強い人は見つけにくい。だから、その、えつと……えつと……」

大和「……もういいよ」

阿藤「上手く説明出来なくてごめんなさい」

草野が戻ってくる。青ざめている。

草野「……所長」

阿藤「草野さん？何かあったんですか？」

草野「食われました」

阿藤「え？」

草野「岬ん研究所ん……老夫婦」

阿藤「え、なに？ごめんなさい、もう一度」

草野「岬ん研究所ん老夫婦が魚に……化け物に食われたと」

阿藤「え、うそ、どうしよう、えつと……」

大和「それ、本当け？」

草野「今、住民かい電話が……」

大和「確認は？」

草野「はい？」

大和「じゃかい、そんな情報、敦之ちゃんは自分ん目で確かめたつけ？」

草野「あ、いえ」

大和「そんな曖昧な情報、非常時に流しなんなよ。すぐん確認して、所長に報告」

草野「わ、わかりました」

出ようとする草野。

息を切らせた小菅が立っていることに気づく。

小菅「今は本当か？」

草野「あの、いや……」

小菅「食われたのか？」

阿藤「食べられてません」

草野「所長」

大和「安全である可能性は極めて高い。ただし詳しく調査中」

小菅「調査して、次は何け？ 各種手続きけ？ そうしちよっ間に何が起こっちゃうとか、俺たちには一切知らせん。隠そうとする」

阿藤「隠しているんじゃないよ。もし間違った情報を発表したら、パニックが起ころうぞ？」

小菅「駆除しね」

阿藤「はい？」

小菅「駆除しねち。人間に危害が加えられたとよ。これはもう第四段階じゃろ。あんやつらを退治せん」と

阿藤「小菅先生、それは出来ません。今はまだ第二段階……」

小菅「あんたは外を見たんですか！ えらいなこつになっちゃうんですよ。足ん生えた魚が暗闇ん中、群れをなして駆け抜けよる。よっぽど腹が減っちゃうんですよ。餌を求めち家ん中に入ろうとまでしちよります。そこん家じゃ、鶏小屋が襲われた。俺も追いかけられた。ここん逃げ込まんかったら、今頃たぶん……。パニックはもう起きちよる。誰ん責任かはわかりますよね？ みんな駆除を望んじよった。魚んせいで村がめちやくちやになるのを防ぎてかった。それなん、あんたたちはそうせんかった」

阿藤「だって、国の決まりで……それに住民説明会で皆さん賛成して……」

小菅「電気柵が効く、魚は人を襲わん、ブルーーツーリズムまでには何とか出来(く)る、絶対(ぜ)ってえに安全じゃ。そんげ言ったかい賛成したんです。でんども嘘やった。柵が破られち人は食われた。そん上数は増えちよる。あれは二十頭やらいわん。一週間で追い出しきるっわけがねえ」

地図を手に七生と大次、牟礼がくる。

七生「(阿藤に)電気柵は復旧しました。魚に効かなかったんじゃない。漏電して、電力が弱まっていたんです」

阿藤「どういことですか？」

七生「詳しい説明は後で。草野さん」

草野「はい」

七生「村内放送で住民の方に建物の外へ出ないように呼びかけて下さい。それから、落ちついて行動するようにと。魚が人を食べるという風聞が広がっています」

草野「わかりました。放送後、事実確認をしちきます」

草野、大和に一瞬視線を送ると出ていく。

七生「(阿藤に) 状況を第三段階に引き上げます」

阿藤「第三段階……つまり」

七生「放獣を前提にした捕獲の実施」

阿藤「今まで誰も捕まえられなかったのに……」

七生「足の生えた魚の生体は調査済みです。(村の地図を見せて) 電気柵が破られたのは蛭子ヶ浜のこの地点。魚たちは柵を突破した後、西へ向かっている。そこで先回りして魚見浜と西ヶ浦の二か所に集魚灯を設置します」

阿藤「そうか、あのお魚も光に集まるんですね？」

七生「大次さんは魚見浜を、牟礼さんは西ヶ浦の方を指揮して下さい。集魚灯の周りに魚がある程度の数集まったら網で取り囲みます。その上で朝を待って電気柵の向こうに移動させる」

大次「取りこぼした個体については？」

七生「釜叩きでの追い払いで対応しましょう」

大次「分かりました」

牟礼「なんで駆除せんのですか」

七生、牟礼を見る。

牟礼「なんでそんげあんやつらを、生かそうとするんです？ 駆除やら簡単でしょう。干物ん毒を混ぜち道に撒いちよげばいい。あとはあんやつらが勝手に貪って、勝手に死んちいく。なんにも、難しいこつやらないです」

阿藤「死体はどうするんです？」

牟礼「そんげなもん、なんとでんなる」

阿藤「人に危害を加えない限り、野生動物を駆除してはいけないんですよ」

小菅、割り込む。

小菅「危害なら十分受けちよるわ！ 岬ん老夫婦が食われたじゃねえけ！」

阿藤「ですから、それはまだ調査中です」

小菅「こうしちよつ間にも犠牲者が増えちいく！」

大次「俊一、落ち着け」

小菅「落ち着いちよるるか。俺は医者じゃ。村ん者の健康を守るこつが務めやつちゃ。

今すぐ第四段階に引き上げね。して駆除を許可しね」

阿藤「駄目です。確認が取れるまでは絶対に駄目なんです」

小菅「そんげ責任を逃れてえつけ？　こん村よりも、自分ん保身が大切か？」

阿藤「違います！　人とお魚は一緒に暮らす。暮らせるはずなんです。（絵を出す）この村はガラパゴス諸島やコモド島のように、人と古代の生き物が共に生きる……」

小菅「うるせえ！」

小菅、阿藤の絵を引き裂く。

悲鳴を上げる阿藤。

大和「俊一ちゃん！　さすがにそれはねえっちゃねえけ！」

力なくひざまずき、絵の破片を拾う阿藤。

肩で息をつく小菅。

七生も大和も大次も、悲しげな阿藤のことを見ている。

そこへ木の皮の束を手にした那美江が来る。

那美江「そんなたちに何を言っつてん無駄よ」

男たち、那美江を見る。

七生「草野さんの奥さん？」

那美江「所長は絶対に魚を殺さん。だつてそれが仕事やっちゃもん。こん人は環境省を左遷されたっちゃねえ。こん村に派遣されたつよ」

阿藤、那美江を見る。

那美江「集落支援センターん設立が二年前。汐留教授ん自殺も二年前。偶然にしては出来過ぎちよる。これはね、国による陰謀やとよ。あん魚は国が米軍と協力して開発した生物兵器。そして所長とそこん先生(七生)は国から派遣された研究員。化け物ん力を試すため、こん村で実験をしちよるっちゃ」

大和「え、あの、それまじで言っつちよりますか？」

那美江「何もかんも辻褄があうやん。(一人一人に語りかける)二年前、汐留教授は遺伝子操作の末にあん化け物を作り出した。じゃけん化け物たちは逃げ出した。教授は機密保持んため研究所ん職員を毒殺、自分も毒を飲んだわ。こん事態を受けて、日本政府は魚ん駆除を検討したに違いねえわ。それなのん米軍が生け捕りにしろつて命じたつよ」

大次「そんげな映画みてえな話、誰が信じとけ」

大和「そうじゃ。田舎者バカにしんな」

牟礼「わしは信じとぞ。以前かい、そんげな噂は聞いちよった。先生も所長も化け物退治せんのは殺せん理由があるからやちいうてな」

牟礼、阿藤の前に立つ。

知っつか知らずか、阿藤の絵の破片を踏みつけている。

牟礼「初めはわしも信じんかった。じゃけん、さつきかい、あんたどんん態度見ちよくわかった。あんたどんが魚をかばう様子は異常じゃ」

七生「僕らは、住民の皆さんとの合意を形成した上で……」

那美江「それはあんたらに騙されちよる時ん話。じゃけん今は違う。私たちは真実にした
どりで着いた。もう誰もあんたらを信じん」

大次「那美江さん、あんたまさかこんこつ、村中に触れ回ったつか？」

那美江「みんな、納得しちよったわ」

大次「こん非常時に、根拠んねえデマを流したつか？」

那美江「デマじゃねえ。隠された真実よ」

草野が飛び込んでくる。

草野「大次さん！ あの、岬ん老夫婦んこつですが……（絶句する）」

大次「どうした？」

草野「首を振る」

大次「敦之！」

草野「家ん中は空っぽで、代わりに、あん化け物が……二人とも姿はねえして……」

草野、その場にしゃがみこむ。

草野「……俺が、保護に賛成したかい」

側に立ち、話しかける那美江。

那美江「……あんた」

草野、すぐるように那美江を見る。

那美江「気によむこつはねえよ。あんたはだまされちよったっちゃ。人はみんな間違う。

気づいたただけでんあんたは偉えよ」

草野「顔を手でおおう」

那美江「とってもいいご夫婦じゃったがね。退職して、都会から越しちきて。あんま私

たちとは関わりらんようにしよったけん。でん、まさかこんげな目に合うやら、予

想もしちよらんかったはず」

牟礼、無言で部屋を出ようとする。

大次、牟礼の行く手を阻むように立つ。

牟礼「大次」

大次「イクチオステガは人を襲わん」

七生「草野に確認は十分に行いましたか？ ご夫婦が留守のところに魚がたまたま入

り込んだ。そういう可能性はありませんか？」

小菅「まだ言うけ」

那美江「もう役所に騙されたらいかん。国ん良いようにされたらいかん。うったちはう

ったちん手で村を守ると」

行こうとする牟礼と小菅、それを止める七生と大次。

と、呆然としていた草野が大次にとびかかる。

もみあいになる男たち。

その足元で踏みにじられる阿藤の絵。

阿藤、ゆっくりと立つ。

阿藤「(呟く)駆除しますから」

牟礼が七生を弾き飛ばす。

七生、行こうとする牟礼の腰にしがみつく。

阿藤「(叫ぶ)駆除しますから！ もうやめて下さい！」

静まる一同。

阿藤「駆除を許可します。第四段階に引き上げます。魚を殺して下さい」

阿藤、絵の破片を拾い始める。

阿藤「坂根は素敵な村です。恵み豊かな自然と暖かい人々。でも今はちょっとおかしくなってる。あの怪物が夜、村に訪れるようになったから」

阿藤、拾い切った絵の破片を抱きしめる。

阿藤「僕は環境省から左遷されました。本当です。現実にはそぐわない、理想を追いかけた計画ばかり立てていたから。純粹に地球のことだけ考えていたから。陰謀なんてそんな、僕には一番似合いません。同期が知ったらきっと笑います。欲得づくの世界にくたびれて、身も心もすりきれて、ぼろぼろになった僕を、この村は優しく迎えてくれた。死にかけた僕の心を助けてくれた」

阿藤、七生を見る。

阿藤「この村がああ怪物と共に生きることが出来るのなら、どんなにいいか。今でもそう思います。でも僕は、この村を助きたい。僕を、助けてくれたから」

阿藤、牟礼たちに向かって頭を下げる。

阿藤「ご迷惑をお掛けしました。駆除を、始めて下さい。(七生に)先生。どうか、最後

まで、ご指導、お願いします」

七生「……駄目です。こういう時こそ冷静に判断していかないと」

阿藤「(怒鳴る)第四段階に引き上げるんだ！」

七生、絶句する。

阿藤「那美江たちに駆除を決めれば、僕のこと、信じてくれますよね。この村の味方だって分かってくれますよね？」

那美江「もちろんです」

阿藤「(草野に)野生動物の駆除に必要な手続きは？」

草野「市の環境課に被害発生状況調査書を提出、捕獲駆除申請をします」

阿藤「(小菅や牟礼に)電気柵購入の際、補助金を申請しました。僕たちは猪と戦っている。そこは押し通します。(草野に)手続きにはどのくらい？」

草野「二、三日ほど」

阿藤「なるべく急いでもらって下さい」

草野「それかい、駆除には獣医師、もしくは資格を有する者ん立会が必要になります」

阿藤「これ以上、外部から人を呼ぶわけにはいきません」

草野「獣医師なら、すでんここに」

阿藤、七生を見る。

大次「お前ら……」

阿藤「先生は何もしなくていいですよ。ただ、これから起こること、その全てに立ち会って頂ければ。(草野たちに)心の準備はいいですか?」

草野、牟礼、小菅、頷く。

七生「……やります」

阿藤「？」

七生「駆除は僕が引き受けます。僕が手を下す。一頭一頭、安楽死処分させます。手順も僕が整える。だから……僕の指導には必ず従って下さい」

大次「先生！」

地図を手に出ていく七生。

あとを追う那美江、草野、牟礼、小菅。そして阿藤。
残された大次と大和。

(第三幕へ続く)

■ 第三幕・一場 (三日前) ■

神楽宿、朝。

床に散らばる御幣や神、彫り物、陶器の欠片のようなもの。

「ご神体を収めていた箱が転がっている。中は空っぽ。」

惨状を片づけている花と、土器の欠片を拾い集める日生子。

破れた彫り物を手に千鶴が立っている。

千鶴「何があつたんですか？」

花「電気柵がまた破られたと」

千鶴「それじゃ、これ……」

花「魚ん仕業」

千鶴「(欠片を見て) それは？」

花「ご神体。神様まで粉々にして行つたと」

千鶴「……魚は本当に駆除しきれるのでしょうか」

日生子「毎晩毎晩、海かい来ち、殺してん殺してん数は減らん。明々後日なのにね、ブルーツーリズム」

千鶴「(破れた彫り物を見つめる)」

日生子「今朝、村ん何人かが家からおらんくなつたつを、草野んとこの敦之が見つけたげな。家ん中は綺麗に片づけられちよつたかい、魚に食われたつちやねえ。逃げ出したつちやろ。化け物が怖(お)じいちゆつて家ん中閉じこもつちよつた者が、いつん間にやら村かい出ちいく。人は減り、魚が増つる。こん村も終わりがかねえ」

千鶴「そんなことありません。きつと……きつと」

花「千鶴奥さん、海を見ただけ？」

千鶴「いえ。何かありましたか？」

花「蛭子ヶ浜ん海にね、蓮ん花が咲いちよつたとよ」

千鶴「海に？」

花「昨日ん夜に、急にちいいよつたわ。蛭子ヶ浜かい見渡す限り一面、淡い紅色ん露がかかつたみたいになつちよつてね。極楽みてえに綺麗じゃつた。あれはたぶんホヤじゃ」

千鶴「ほや？」

花「こん村んホヤはいずれ綺麗な花んなる。陸(おか)に魚が、海には花が満ちていき、世界は終わりの始まりを迎える」

千鶴「花ちゃん、あなた何を知ってるの？」

花「……」

千鶴「神楽を続けると魚が来るって言つてたわね？ 酒田先生によると、この村にはあの魚たちを誘い寄せる原因がある。花ちゃんはそれがお神楽だつて言つなの？」

花「……」

千鶴「花ちゃん」

花「昔、生まれたばかりん子どもを海に流したとよ。初めて授かった子どもじゃったのん、手も足もねかった。じゃかい若い夫婦はそんな子を、葦ん舟に載せち海に捨てた」

千鶴「(気づく) 古い神話ですね。確かその子どもは蛭子神」

花「何千年、何万年、何億年の年月を、蛭子ん神様は流れ漂う。こん村は、そんな神様がいつか帰る場所。坂根神楽は神様が迷わんためん道しるべ」

千鶴「？」

花「もしこれかい大きな地震が起くとして、千鶴奥さんはどんげする？ 地震を止める？ 止めらるる？ 今、こん村で起こつちよつこつも同じじゃ。止めようがねえ。潮留教授はそんなこつに気づいた。じゃき毒を飲んだ。千鶴奥さんはこれ以上知らん方がいいと思う」

千鶴、くしゃくしゃになった彫り物を見つめる。

千鶴「……私たちには子どもがいません。たぶんこれから先も、授かることはないですよ」

花「……」

千鶴「でもね、この村は美しい。だから遺したい。人を食べる怪物が住んでいて、それが避けられないことだととしても」

千鶴、彫り物のしわを伸ばすと、花に差し出す。

千鶴「大次さんが言っていました。人間に、自然のなすことを止めることは出来ない。大切なのはそれをどう受け取るか。花ちゃんが何を知っているのか、どうして隠しているのかは分かりません。でもね、それがどんな答えでも私は、私と大次さんは、ちゃんと受け止めます。止めようのないことならなおさら。腹をくくればいいだけでしょう？ 受け止めて、生きてみせます」

花、千鶴から彫り物を受け取る。

日出子「(二)神体の欠片を並べて) 千鶴さん、あんた聞いちやらんと？ 電気柵ね、細

工がされちよつたとよ」

千鶴「細工？」

日出子「そんなせいで電気が弱まって、魚が柵を破った」

千鶴「誰がそんな」

日出子「大次さんじゃ。村ん者みんな、そう言いよる」

千鶴「そんなわけありません」

日出子「魚の保護が叶わんかった腹いせじゃちゅって」

千鶴「非常時によくある反応です。自分たちが何も出来ない苛立ちを、指導的な立場にある人々にぶつける。私たちは気にしません」

花、千鶴の腕をつかむ。

千鶴「花ちゃん？」

花「こん村んこつ、軽く考えたらいかん」

千鶴「なに？」

花「うちんお母さんも……」

日生子「花ちゃんのお母さんは十五年前、よそ者と駆け落ちをしたんです。村ん者みんなで出し合ってようやく貯めたふるさと会ん積立金を持ち出して」

千鶴「(思わず花の顔を見る)」

日生子「真相は分かりません。花ちゃんのお母さんがおらんかった時期と、積立金が無くなった時期がたまたま重なっただけかもしれん。じゃけん、こん村ん者は、そん二つを結びつけた」

千鶴の腕をつかむ花の力が強くなる。

日生子「その後ん十年、花ちゃんはこん村で、ひどく肩身ん狭え思いをしちきました。今みてえに伸び伸び生きらるようになったつは、うちん人が許したかいよ。じゃけん、うちん人はもうおらん」

千鶴、日生子を見る。

日生子「村んみんな、今日にでん大次さんを白状さするって言っちよりましたよ」

千鶴「そんな、なんの権限があつて……」

花、千鶴の腕をぎゅっと握りしめる。

千鶴、花を見つめ、それから花の手をそっと離すと駆けだす。

その後ろ姿を見送る花と日生子。

日生子「(並べた欠片を見て) 出来た。さ、直しちやろうや。こんげな姿じゃ神様も心細えじゃろ」

日生子、欠片の一つを選び出すと地面に据え、他の欠片を手にとり、その横に置く。その様子を眺める花。

花「……よくわかん(る)ね」

日生子「(無言で欠片を手にとる)」

花「(神体、見たこつあつと?)」

日生子「だつてあんた、うちん人はふるさと会ん会長やったやんけ」

日生子、花に欠片を差し出す。

日生子「あん人が見せちくれたつは、自分だけやち思っちよった? おあいにくさま」

花、日生子と見つめ合うと欠片を受け取る。

「(神体を直し始める花と日生子。)

■第三幕・二場■

破壊された公民館の会議室、朝。

蓮の花を手にした七生がきて、その様子に立ち尽くす。

七生、手に血がついていることに気づく。

手で拭うが綺麗に落ちない。

大和がくる。

大和「楽しいっちゃるかね、こんげ壊して。すげかったげなよ、魚。何十匹も一気ん押し寄せて」

七生「魚はただ通り過ぎただけです」

大和「一応俺ん親父が建てたっちゃわ、こん公民館。それなりん傷心？」

七生「あの生き物は何なんでしょうか？ 足が生えていて陸上でも呼吸が出来る。それをのぞけば魚そのものです」

大和「目隠ししたら大人しくなっしね。(七生の持つ花に気づく) それ、あれけ？ いきなり海ん咲いた？」

七生「はい」

大和「すげえよね。月明かりん下、ばーっち咲き乱れちよっと」

大和、タオルを差し出す。

大和「はい」

七生「？」

大和「血」

受け取り、血を拭う七生。

大和「先生一人んやらせて、本当にごめんね。大変じゃろが、急所刺すの(と鉗を突き立てる仕草)」

七生「会長こそ、手伝ってもらって」

大和「あんげなは手伝いに入らんって。あ、じゃけん、俺、村ん中じゃ一番うめえと思うちやけど。こんげやって、魚ん顔にタオルかくつのと、やってみせる」

七生「……」

大和「七生っち」

七生「はい？」

大和「いや、ほら、あんたん下んお名前」

七生「ああ、はい」

大和「迷ったとよね、どっちで呼ぶか。七生っちか、さかなくん」

七生「よく言われました、それ」

大和「酒田七生で、さかなくん」

七生「七生っちで」

大和「あ、そう？ じゃ俺んこつはNott会長で」

七生「え？ あ、はい……（思い切って）大和っち」

大和「……」

七生「……Not会長さん」

大和「なんなん？」

七生「どう思います、電気柵のこと」

大和「どうって？」

七生「三日連続で突破された」

大和「効かんわけじゃねえっちゃろ？」

七生「はい。今日はこれが」

七生、蓮の花を差し出す。

七生「電気柵の横木に触れるように立てかけてありました」

大和「電気、花に流れる。漏れて弱くなる。魚、突破する」

七生「初めに突破された時は鉄パイプが置かれてました。次は木材。昨日の夜はこの花

大和「どれも偶然置かるっもんじゃねえわ。誰かがわざと置いちいった？」

七生「はい」

大和「なんのためん？」

七生「魚を村に入れるため」

大和「理由は？」

七生「わかりません。心当たりはありませんか？ 犯人がいるのならやめさせないと」

大和「ありすぎつとよねえ。まずは那美江ちゃん？ 敦之ちゃんを村ん中心に据えたが

ちちよる。須田一族やら所長じゃつたら村を守れん。そんげな印象を村ん者に与

えてえとか。あと所長。なんだかんだ言ってお魚が可哀そう。それと……俺？ こ

んげな村、ねえなっつてんいいかね的な？」

七生「会長なのにな？」

大和「Not会長ね。親父が死んで、無理矢理やらされちよつとよ。坂根っちゆう村は、

結構罪深えつちやが」

七生「罪……ですか？」

大和「土台が腐つちよつと。あ、ねえねえ、知つちよる？ 今日、何人か村かい逃げ出

したつち。よそ者のあんたが必死になってやつちよんのんね」

七生「いや、僕は……」

大和「やめちしまえばいいとよ、ブルーツーリズム。岬ん老夫婦、丸のみやつたつちや

ろ？ 血だけ残つちよつたつて。どんげやって考えてん警察沙汰やろ、これ」

七生「……」

大和「七生っちはよ、なんでここまでしてくるつと？ 言つちよくけん安(やし)いよ、

報酬」

七生「そんなんじゃないんです」

大和「やっぱり、政府ん回し者とか？」

七生「違います」

大和「んじゃ何？」

七生「……逃げたんです」

大和「逃げた？」

七生「殺処分から」

大和「だって一日五〇〇頭を殺したって」

七生「殺処分に携わって一週間目に夢を見たんです。たくさん幽霊が僕の体を揺さぶる。凄い声で唸りながら。いくらやめろと喚いても幽霊たちは呻き続ける。僕は叫びながら目を覚ましました。手を見ると血で濡れている。ぶつけたのか引っ掻いたのか。でも僕にはそれが、幽霊の血に見えた。翌朝、僕は何も告げずに宿舎を抜け出しました」

七生、手を見る。

七生「獣医師をやめて、調査員になって、あの時のことは考えないようにしてきた。でもこの村で、皆さんの必死な姿を見て痛感したんです。生かすにしろ殺すにしろ、僕は一度だって本気で向き合ってこなかった。その重みから逃げていた。だから今度は……」

大和「……」

大和、七生からタオルを取ると、拭き残した血を拭ってやる。

拭い終ったタオルを七生に差し出す。

大和「俺はよ、そんげなこつよう分からんっちゃけん。もっと楽に出来んとけ？」

七生「……」

大和「考えて行き詰り）出来んか。洗って返してね」

タオルを受け取る七生。

外から大声が聞こえ、大次が駆け込んでくる。

追う牟礼。

木の皮の束を振り回して那美江が入ってくる。

那美江「挟みね、挟みね！」

牟礼が大次を両腕で挟み込み捕まえる。

大次「挟まれて）痛い、暑い！」

大和「ちよ、ちよ、何しよつと？」

七生「何があつたんですか？」

那美江「こん男が、電気柵連続破壊工作事件ん犯人よ！」

七生「れ？」

草野がくる。

草野「逃げたつちゆうこつは、認めたつちゆうこつでよろしいですか？」

大次「お前らが、いきなり追いかけてくっかい」

那美江「往生際が悪(わり)いぞ!」

草野「もう一度お聞きします。昨日ん夜、電気柵に蓮ん花を立てかけましたか？」
大和「まじけ」

草野「大次さん」

大次「やっちよらん」

草野「電気柵ん細工を施しち、あん化け物どんを村に入れた。違いますか？」

大次「違うわ」

草野「あんたは化け物退治が気に入らん。じゃかい柵を壊した」

大次「こん三日、家から出ちよらんが!」

七生「草野さん、何か根拠があるんですか？」

草野、万年筆を取り出す。

草野「今朝、破壊された電気柵ん側ち拾いました。大次さんの万年筆です。(大次になんでこれが電気柵ん側に落ちちよったんですか?)」

大次「……」

草野「電気柵ん側で、あなたは何をしちよったんですか？」

那美江「早(は)い答えんけ」

大次「……餌を、やりよった」

草野「餌？」

大次「イクチオステガン餌をやりよった」

那美江「化け物ん餌付けをしよったっか!」

大次「じゃけん、電気柵には触れちよらん」

那美江「嘘つきね!」

七生「昨日の夜はどこに?」

那美江「なんけ、いきなり」

七生「こういう場合、まずアリバイを確認しないと」

大和「お、おお、そうやね」

七生「大次さん?」

大次「あんたには、かばっちほしくねえわ」

千鶴がくる。

千鶴「大次さん! (捕まった大次を見て) 副会長に、なんてことを」

那美江「副会長じゃねえわ。化け物に餌をやる気違い男じゃ」

千鶴「取り消しなさい!」

草野「千鶴奥さん、申し訳ねえけんこれは村ん問題です。口を挟まんじよって下さい」

千鶴「わたしだって村の一員です。大次さんが電気柵を壊すわけありません。詰まらな

いデマに踊らされて、恥ずかしくないんですか?」

草野「証拠はありますか？」

千鶴「証拠？」

草野「副会長が柵ん細工を施しちよらん。そんな証拠はあるんですか？」

千鶴「今日まで大次さんが村にしてきたこと、それが証拠です。先代会長が病気で倒れた際、大次さんは坂根に呼び戻されました。それ以降、村のために働いた。先代会長が亡くなってからはずっと、大和くんを支えてきました。順調だった恐竜の研究を捨て、古生物学者としての道も諦め、この村のために尽くしてきたんです。その夫が、自ら村を壊すようなこと、するはずがありません」

那美江「感情論け。そんげなんでうったちが納得すっと思うけ？」

千鶴「それはあなたたちも同じでしょう？」

那美江「なら村みんな集むっかい、そこで判断しちもらおうや。うちん人とあんたん旦那。どっちん言うこつが信じらるっか」

千鶴「どうぞ。私たちに、恥じるところはありません」

牟礼「千鶴奥さん。やめちよきね。日出子奥さんの手前、表立っては言わんけん、誰ももう、ふるさと会には期待しちよらん」

千鶴「はい？」

牟礼「敦之が中心になって、行政と村を繋ぐ新しい組織を作る。そんげな話も出ちよる。

先代会長とともにふるさと会は終わった。大次をかばう者はこん村にはもうおらんわ」

千鶴「……そんな……公民館の維持も、特産品の考案も、ブルーツーリズムや神楽の提案も、みんな大次さんが……そのことも忘れて……」

大次「千鶴、もういいわ」

千鶴「よくありません」

大次「僕がやった。そんげなこつにしちよけ」

千鶴「あなたがいなければ坂根は、立ちいかなくなりますよ」

大次「滅べばいい」

千鶴「はい？」

大次「滅べばいいっちゃ、こんげな村」

那美江「それがこん男ん本音じゃわ！」

千鶴「大次さん、感情に任せてそんなこと……(言ってはいけません)」

大次「僕は今、いたって冷静じゃが」

大次、牟礼を振り放す。

大次「こん村は土台が腐ちちよる。僕がおってんおらんでん、いずれ滅びる。早えか遅えかん違いだけじゃわ。(全員に)いいけ、よく聞きねよ。お前らが尊敬してやま

ん先代会長は十五年前……」

大和「ととととと！」

大次「あん男は十五年前、ふるさと会ん積立金を盗んだっちゃ。しかもその罪を、比嘉野家ん涼子さんに押し付けたっちゃ」

沈黙。

那美江「……う、嘘よ。先代会長はそんげなこつせんわ」

牟礼「理由は？ 先代会長がおやりになったちゅうなら、それなり納得いく理由があるはずじゃ」

大次「あん男はこんげ小さな村でん自分のもんにしてくて仕方がねかったっちゃ。じゃかい比嘉野家を追い落とすち、須田家に村ん信用が集まる方法を考えた。あん事件のあと、先代会長は私財を投じて村ん道路を直したじやろう。港ん整備、診療所ん設備ん充実。あれは全部、盗んだ積立金が元になっちゃる」

大和「言うかね、そこまで……」

大次「お前ら、自分たちが何をしちきたか考えてみたらいいわ。涼子さんの娘ん花を、十年間ずつと虐げた。自分どんの暮らしがあん子ん犠牲ん上で成り立つちよつちゆうこつも知らんでよ。もちろん僕じやって知らんかった。死ぬ前にあん男かい打ち明けられて知ったっちゃ。そんだけじゃねえ。大和と僕んこんげ言った。こん村ん土台を立て直せ。自分が犯した罪を、僕ら二人償えち言ったっちゃ」

大次、千鶴を見る。

大次「どんげけ、千鶴。こんげな村、滅ぶべきじやろ」

千鶴、大次を見、それから頬をひっぱたく。

よろけた大次をさらに叩く千鶴。

大和「千鶴さん、ちょっと、ちょっと」

千鶴「叩きながらあなたがこの村で新しい夢を見る。そう言ったからついてきたんです。それなのに……どうしてそんな、過去に縛られて。私と二人、未来を見ようと言ったじゃありませんか！」

大次「痛え、本当に痛え！」

千鶴「叩いている)どうして、どうして……」

千鶴、大次を叩きつくすと、草野たちに土下座をする。

千鶴「夫は、けして犯人ではありません。理由はどうあれ、この村のために尽くしてきました。その努力を否定しないで下さい」

草野「……柵ん向こうに行つて下さい」

千鶴「はい？」

草野「もし大次さんが犯人ではないちいうんなら、柵ん向こうへ行つて下さい。もし行けたなら、我々も信じましょう。この人が無実であることを」

大和「敦之ちゃん、それは無茶やろ」

千鶴、ゆつくりと立ち上がる。

大和「千鶴さん」

千鶴「あなたの叔父さんはとても強い人です。今は調子が悪いだけ。土台が腐っているのなら、みんなで新しいものを作りましょう。生きてれば何度だってやり直せる。あなたの叔父さんは昔、わたしにそう教えてくれました」

那美江「強がり言うんはやめちよきね。うちは昨日ん夜、海を見て来っちゃ。何も無い真っ黒い海から、あの化け物どもが湧いて出る。無事じゃすまんよ」

千鶴「わたしは大丈夫です。(草野に)行きましょう」

七生「(何かに気づく)待ってください」

千鶴、七生を見る。

七生「(大次に) 昨日の夜はどこにいましたか？」

大次、答えない

七生「大事なことなんです。お願いします」

大次「……何頭よ」

七生「？」

大次「何頭殺したっか？ 漁港ん倉庫を見ちきた。埋めもせんければ捨てもせん。イクチオステガン死体がうず高(たけ)く積まれちよったわ。殺した後は倉庫ん扉を固く閉ざす。そんげして夥しい数ん死から目を背くるっちゃ。僕にはそれが許せん」

七生「……九十二頭です」

大次「……」

七生「一番初めに殺したのは、眉間に星形の白い斑点を持つ個体でした。体長は二メートル二〇センチ。一〇五キログラム。二番目は全体に美しい青色の模様が散った個体。体長は一メートル八十五。重さは八十六キログラム。三頭目は……」

大和「もういいよ」

七生「三頭目は目の側に虹色の文様がありました。他の個体と違って、とても美しい羽のような鱗を持っていた。まるで着飾った少女のようでした。体長は二メートル十六。体重は……」

大和「七生っち」

沈黙。

七生「須田さん、もう一度訊きます。昨日の夜はどこにいました？」

大次「……家んおった」

七生「夜の間、ずっと？ 証人はいますか？」

大次「九時頃までは一人じゃったわ。その後、日出子義姉さんや村ん年寄りどんと話をした」

七生「それは何時まで？」

大次「話しよったら半鐘の叩く音が聞こえちきたわ。牟礼んおっさんが来て、柵が破られたち教えちくれて……」

七生「柵が壊されたのは十一時頃です。つまり、夜の九時から、十一時まで、須田さん

にはアリバイがある」

草野「九時よりも前に花を置いたんでしよう」

七生「会長、蓮の花が海に咲いているのを見たと言っていましたよね？」

大和「ああ、見たよ」

七生「それは何時頃？」

大和「神楽宿で神楽の練習を見終っちかいじゃかい……十時頃かえ？」

七生「那美江さん、昨日、あなたが海に行ったのは何時頃でした？」

那美江「なんけ、これ尋問？」

七生「何時頃、海を見たんですか？」

那美江「九時半頃じゃ」

七生『何も無い真っ黒い海から、あの化け物どもが湧いて出る』。先ほどそう言いまし

たね。つまり九時半の時点では海に蓮の花は咲いていなかった。海に花が咲いたのは九時半から十時の間ということになります。そして九時から柵が壊されるまでの間、須田さんは日出子奥さんやお年寄りたちと家で話をしていた」

大和「もしたら、叔父さんには柵に花を立てかけられんわ」

七生「つまり須田さんは犯人ではない」

大和「なら誰が柵に花を置いたと？」

七生「分かりません。しかし大次さんではない」

沈黙。

草野「……なんで花なんですか？」

全員、草野を見る。

草野「なんで犯人は鉄パイプやら木材じゃなくて、花を立てかけたんですか？ 花は海に咲いちよります。柵を乗り越え、魚ん群れをかき分けて、わざわざ摘んぢかいこんといかん」

草野、七生と対する。

草野「今日一日、ずっとそんなこつが引つかかちよりました。じゃけん今ん話を伺ってやっと分かった。花は電気柵が壊された後に置かれたんです」

大和「なんでそんな面倒なことを？」

草野「花んせいで電気柵ん電気が弱まった。そんげやって見せかかったためじゃ」

大和「じゃかい、なんで？」

草野「アリバイを作るため」

草野、大次を見る。

草野「あなたは九時よりも前に花ではなく、鉄パイプか木材を柵ん立てかけた。じゃけど朝んなつて万年筆を落とちきたこつに気が付いた。そこで一計を案じたつちや。壊れた柵を越え、眠る魚ん間を通り、花を摘む。して壊された柵ん側に置いたんです。柵に細工が施されたつが、九時半以降じゃつち見せかかったために」

七生「それは違います。もし大次さんが朝になって柵に近づいたのなら、その時に万年筆を取り戻したはずです。花だけ置いて帰るはずがない」

草野「じゃったら、こんな態を見越してわざと置いたっちゃ」

七生「わざと？」

草野「一回疑われた上で無実じゃっちゅうこつを証明する。それが目的でこんげなこつを……」

大和「それはさすがにこじつけ……（じゃないか？）」

草野「こじつけでなんなんでもいいわ！」

大和、言葉を失う。

草野「(大次に)あなたを信じたために、私は判断を誤りました。そして村ん者が命を落とした。犯人はあなたでないといかん」

那美江が口をはさむ。

那美江「そ、そうやわ。(みんなに)さっきん話を聞いたやろ。こん男は坂根が滅べばいいと思ひよる。どんげ理屈をつけてん、そんなこつは変わらんわ。こん男だけが、柵ん花を立てかくつ動機を持ちちよる。柵を壊して、人を食う化け物を村ん入れた」

大次「イクチオステガは人を食わん！」

那美江「食うやろ！（包帯を巻いた手をかざす）うちが証人じゃ！ あん化け物はうちんこつ食おうとして手ん咬みついた。そんなこつを認めんで、いつまでん化け物かばっちかい。さっさとこん村かい出て行け！」

小菅が戸口にいる。

小菅「それは違うわ」

大和「俊一ちゃん？」

小菅「放っておこうち思っちよたが、やつぱり無理じゃ。これ以上は耐えらん。那美江ちゃん、あんた目的が違ってきちよる。俺は村んためんなるち思って協力したっちゃ。大次を追いつむったためじゃねえして。(草野に)昨日、岬ん老夫婦ん家に流れちよった血を調べた。あれは、人間のもんじゃねえ。鶏ん血じゃ」

那美江「ちよ、なん……」

小菅「魚は夫婦を食わんかった。おそらく二人はただ逃げ出しただけじゃろ」

那美江「じゃ、じゃかいなんけ。うちは襲われた、食われそうんだった！ あん魚が化

け物じゃちいうこつん変わりは……（ねえ）」

小菅、那美江の手を掴み、包帯を解こうとする。

那美江「ちよ、ちよ、何すつと！ やめ、やめ、やめ、やめって！」

草野「(止めに入る)俊一ちゃん！」

もみ合う小菅と草野、那美江。

小菅、那美江の包帯をほどききる。

とっさに手を隠す那美江。しかし小菅が手を取り、みんなに見せる。

小菅「よく見ちみね。傷やら一つもねえ。綺麗なものじゃわ。那美江ちゃんは、魚ん咬まれたっちゃねえ。驚いて転んだだけじゃわ」

呆然と那美江を見る草野。

草野「……どういうこっけ」

小菅「那美江ちゃんが言ったっちゃ。敦之が駆除を主張しちよる。なんとかそれを叶えてやりてえ。じゃかい、魚ん咬まれたっちゃゆうこつんしちくれち」

那美江「(小菅に)あんたやって賛成しちよったじゃんけ！ 大事になっ前に、話を大げさんしてでん村んみんなん危機感をあおるべきじゃち」

大和「那美江ちゃんも、老夫婦も、誰も魚に襲われちよらんかった……？」

草野「(小菅に)俊一ちゃんが追いかけられたち言うんは……」

小菅「あれは本当じゃ。ただ、今冷静になっちかい考えてみっと、魚は俺を追ったんじやねえ。魚ん群が駆け抜けちよるとこん、俺が出くわした。それを俺は……」

草野、大次や七生を見、那美江に対する。

草野「那美江に)なんで……なんでそんげなこつ……」

那美江「……」

草野「那美江！」

那美江「……手柄を立てさせたかったつよ」

草野「手柄？」

那美江「それで、あんたを偉くしてかった。だってあんた、一番頑張っちよるじゃんけ。

朝かい晩まで村んためん走り回って。会長も副会長も所長もいらん。先代会長ん代わりんこん村を治むつべきなのはあんたじゃわ」

草野「そんげなこつんためん……」

言葉を失う草野。

大和「ねえ、ねえ、じゃつたら結局、魚は殺さんでよかったつちゆうこと？ 駆除せん

でよかったつちゆうこと？ そういうこつんなるよね？ ねえ、誰か答えねよ。

ねえ？ ねえ？ ねえってば！」

沈黙。

大和「俊一ちゃんも那美江ちゃんも、自分のしたこつ分かちよる？ 七生っちは、殺

さんでんいいのん殺し続けた。元獣医っちゆう理由だけで、全部背負ったとよ。

俺たちは何したけ？ 魚追っ払ったり、目隠ししたり。そん間ずつと、この人は

一人で苦しみ続けた。俺たちん何倍も、何十倍も。ただひたすら手を血で汚し続

けたつちや！」

大次「大和」

大和「なんけ！」

大次「会長として出来たことはたくさんあった。じゃけんそれをせんかった。お前も同

じじゃ。」

大和「分かっちゃっわー!」

ヘルメットを被り、体中に木の皮をぶら下げ、釜を持った阿藤が駆け込んでくる。

阿藤「草野さん、こんなところで何してるんです! 今、市から連絡がありました。(手帳を出す)『坂根地区の住民に対し屋内退避を発令する』」

草野「屋内退避?」

阿藤「宮崎県一帯の沿岸に、未確認の生物が多数上陸。延岡および大潮方面に向かって進行中。生態が判明するまでは屋内に退避すること!」

草野「もしかして、そんな生物っちゅうのは……!」

阿藤「(手帳を見る)『生物の姿は魚類に酷似。爬虫類状の脚部を持つ』」

牟礼「足ん生えた魚」

阿藤「もうこの村だけの問題ではありません。宮崎県一帯の海岸に、あのお魚が上陸している。しかもそれだけじゃない。あの……!」

草野「どんげしました?」

阿藤「大きなお魚が」

草野「大きな魚?」

阿藤「家くらいある魚が海の間こうからこちらに向かって近づいているんです。僕が見た時には沖の方にすでに三匹。今はもっと増えているかもしれない」

牟礼「釜叩きは?」

阿藤「やつてるんですけど、遠すぎて聞こえているのかどうか。電気柵だって簡単に踏み越えちゃう……!」

七生、歩き始める。

阿藤「先生?」

七生「様子を見てきます。観察すれば、対処方法が見つかるかもしれない」

阿藤「対処方法って……!」

七生「どんなに大きくても相手は動物です。苦手な味や匂いがあるかもしれません」

阿藤「今までのお魚とは全然違うんですよ。踏まれたら死んじゃいます」

七生「ではどうするんです?」

阿藤「どうって……!」

七生「このまま、村が踏みじられるのを見ているんですか?」

阿藤「だって、すごく大きい」

七生「所長は住民の皆さんを避難させて下さい。僕は魚の対応を検討します」

阿藤「でも……!」

大和「もういいわ」

七生、大和を見る。

大和「あとは俺たちがやる。もうこん村を背負う必要はねえ」

七生「……口蹄疫の際、身をもって知ったことがあります。人間には絶対に勝てない力がある。祈っても願っても世界が壊れるまで決して止められない。とても大きな力です。僕は一度、その力に屈しました。でもね、屈してはいけなかったんです。たとえ絶対に勝てなくても、僕らは抗わなくてはならない。これは、僕自身の戦いでもあるんです」

血のついたタオルを手に巻き、去っていく七生。

その背を見送る村人たち。

大和、大次、千鶴、草野、那美江、阿藤、牟礼、小菅。

■ 第四幕・一場 ■

神楽宿、夕方。

花と日生子、組み立て直した土偶。

それは、足の生えた魚を象っている。

花 「いよいよやね。足ん生えた魚が地上に満つる」

日生子 「海には花が咲き乱れ、人は魚んなち海へと帰る」

花 「足ん生えた魚は何になつと？ 恐竜？ それとも人間？」

日生子 「もつと別んもんかも」

花 「誰も信じんわね、こんげな話」

日生子 「起きんはずんこつが簡単に起こつてしまふ。そんげな世界にうつたちはみんな生きちよるんです」

花 「今日じゃつたはずなのんね、ブルーーツーリズム」

日生子 「本当にねえ。ぼんぼん漁も干物作りも、みんな一生懸命準備したのん」

花 「仕方がねえね。世界中で足ん生えた魚が陸に上がつちよつちやもん」

日生子 「昨日よ、調査員ん先生が訪ねちきたわ。汐留教授ん研究論文を見せてほしいつて。事件んあと、論文がうちん人ん手ん渡つたち、誰かかい聞いたげなが」

花 「それで、どんげしたと？」

日生子 「見せましたよ。次はきつと、あんたん所(と)こんくる」

花 「理屈やら知つてん意味ねえのん」

日生子 「あん人はそんげ思つちよらせん。きつとまだ、何とかでくつて考えちよる」

日生子、魚の土偶を見る。

日生子 「蛭子ん神様は無事にお帰りんなつた。次はうつたちが帰る番じゃ。花ちゃんは何になりてえけ？」

花 「何つて？」

日生子 「魚」

花 「選べつとや？」

日生子 「さあ」

花 「日生子奥さんは？」

日生子 「うちは……マグロ？」

花 「マグロ？ なんで？」

日生子 「あん人ん嫁いぢかいずつと、朝かい晩までこん村んこつばつか考えよつた。マグロは世界中ん海を渡る。なんか楽しそうやろ？」

花 「いいね」

日生子 「伸びをする(嫁いぢ産んぢ、育てち見送つち。こん村でやらんといかんこつはまだまだあんのん。清々しいつか、切ねえつか」

花 「両方じゃねえ？」

日出子「……花ちゃん」

花「ん？」

日出子「したらお先に」

日出子、会釈すると神楽宿を出て行く。
一人になる花。

■ 第四幕・二場 ■

公民館、夕方。

大和を中心に大次、阿藤、牟礼が地図を覗き込んでいる。

その傍らでトランシーバーに耳を傾ける草野。

草野「西ヶ浦方面かい連絡。住民全てを確保。これかい、大潮市ん向かうそうです」

大和「地図をみて）よし。あとは魚見浜か」

草野「今、俊一たちが説得んあたっちよります」

大次、トランシーバーに耳を傾けている。

大次「自衛隊かいじゃ。ヘリからん目視じゃ、巨大な魚が二頭、西ヶ浦ん手前二〇〇メ

ートルかい三〇〇メートル付近までちかついちよる」

阿藤「さっきまで蛭子ヶ浜に向かったのに？」

牟礼「こんままじゃと西ヶ浦を出発したバスん突っ込むが」

大和「牟礼に）おっさん、火の見やぐらん上っちかい、魚ん進路と速さを確認しちきち

くれん」

牟礼「分かった」

出て行く牟礼。

入れ替わりに小菅がくる。

小菅「駄目じゃわ。魚見浜ん年寄りどん、村を離れんちゅって動かんわ」

大次「避難指示じゃち言いよんのん」

小菅「来ちかい、説得してくれんけ？」

大次「いや、じゃけん……」

千鶴がくる。

千鶴「大次に）大次さん、早く。バスの準備は出来ているのに、出発出来ないんです」

大次「俊一が言って聞かんつを、なんで僕ん説得出来（く）っ」と

千鶴「あなたが言うなら動こうと、みなさん言ってます」

小菅「腐ってん副会長っちゅうわけやね」

大次「……大和、（後を）任せてん？」

大和「俺ん会長スキル、なめなんなよ」

大次、出て行く。

追う小菅と千鶴。

草野「トランシーバーに耳を傾け）牟礼んおっさんかいです。西ヶ浦ん手前二〇〇メー

トルに魚二頭を確認。魚見浜方面ん向かって進攻中。おっさんの見立てじゃ三分

後に上陸すっかもしれんちゅうこつです」

大和「バスは？」

草野「こんままじゃと魚ん進路んちゅうどぶつかる」

大和「（地図を見て）引き返すか？」

草野「そんげしたら西かい出られんくなります」

大和「引き返しちかい、自衛隊んへリコプターに乗せちもらうとか？」

草野「人数が人数です。間に合うかどうか」

阿藤「お神楽だ」

草野「はい？」

阿藤「(手帳を見て)酒田先生、言っていましたよね？ お魚は坂根神楽に導かれている可

能性がある。あの時はみんな信じなかったけど、もしかしたら……」

大和「今かい演奏すつと？」

草野「いや、録音した資料が、確かあったはずですよ」

阿藤「それを流しましょう。そうすれば、お魚がそちらに向きを変えるかもしれない」

草野「村内放送ですか」

大和「待ちね、したら集落支援センターに魚が突っ込むかもしれんちゆうこと？」

阿藤「僕、行ってきます」

草野「所長」

阿藤「止めないで下さい」

草野「放送の仕方、わかつとですか？」

阿藤「分かりません」

那美江がくる。

那美江「あんた！」

草野「お前、避難したつちやねえつか？」

那美江「これ、渡そうち思つて」

那美江、木の皮を渡す。

草野「そんげなこつんためんお前は……」

阿藤「(皮をみて)これさえあれば百人力です。草野さん、行きましょう！」

大和「(草野に)村内放送を流したらすぐん脱出。出来れば、そのまま村ん外へ。いいね」

草野「分かりました」

草野、那美江、阿藤出て行く。

一人残つた大和。

そこへ日 outgoing が来る。

日 outgoing 「大和」

大和「母ちゃん、逃げたつちやねかつたどけ？」

日 outgoing 「残つちやつた」

大和「頼むわ、もう……」

日 outgoing 「なんかえらい久しぶりやね」

大和「なんが？」

日 outgoing 「ここに、こんげして二人で立つの。お父さんが亡くなった時以来かね？ こん

げな小さな公民館でん、捨てちいくとはやっぱり惜しい」

大和「捨てんよ。また必ず戻っちくる。ほら、行って」

日生子「電気柵ん細工した者がおる。あんたそんげ言いよったね。あれね、うちとよ大和「へ？」

日生子「鉄パイプ拾っちかい柵ん向かって、ぱって(倒す仕草)」

大和「なんで？」

日生子「うちにもよく分からん。柵ん前で色々なこつ思い出しよったら、体が勝手ん」

大和「そんなせいで、みんなどんだけ苦労したか……」

日生子「もし今度、花ちゃんに会うこつがあつたら、お礼を言っちよきねよ」

大和「なんで」

日生子「あん子ね、うちが柵に細工するとこ、見てしまったつよ。じゃけん、そんなこつ

は黙っちよっちかい、壊れた柵ん側に蓮ん花を置いちくれた。なんじゃったかね、

あれ、ア、ア……」

大和「アリバイ」

日生子「それ。うちにアリバイを作ろうとしたげな」

大和「母ちゃんのこと、かばってくれたつけ」

日生子「あんたんためよ。うちが犯人ち知つたら、あんたが泣くやろ。じゃかいそんげ

やっしてくれたて」

大和「泣かんし」

日生子「うちん人が作ったもんをね、みんながみんな、我が物顔で守つと、壊すと」

大和「え？」

日生子「悔しかったつか、妬ましかったつか。いくつんなつてん駄目じゃね」

日生子、大和に向かう。

日生子「あんたが、一生懸命、村んために走るようになつちかい、黙っちよんのが辛く

なつてきた。悪いお父さんと悪いお母さんで、本当に「ごめんね」

大和、何か言いたいが言葉が見つからず、体を動かす。

大和「ああ、もう、こん世の中ん、悪くねえ人間やらおつとけ。こんげな小つせえ村でんみんなみんな嘘つちかい傷つけちかい自分のこつばかり考えちよ！」

日生子「……」

大和「自分が間違つちよるつち気づいたんなら、それでいいじゃん。母ちゃんのかせん

謝りなんなよ」

日生子「ごめんね」

大和「じゃき！」

村内放送による神楽の調べが聞こえてくる。

日生子「神楽？」

大和「(トランシーバーをとる)はい、こちら大和、じゃねえ、公民館、どうぞ」

日出子、神樂の音に誘われるよう。

大和「叔父さん、何？ 説得成功？ 分かった、そのまま脱出して。大丈夫。公民館は俺が閉めちよく。うん、うん……」

日出子、戸口に向かう。

大和「はい？ 人間が魚になった？ 何言いよつと？ 叔父さん？ 叔父さん？ おおーい、おおーい？」

日出子「大和」

大和「ちよつと待ってね、なんかわけが分からんこつが起こつちよるみたい」

日出子「人は魚に、魚は陸に。海に花が咲き乱れ、世界は改まる」

大和「はい？」

日出子「今まで、本当にありがとう」

日出子、魚になる。

大和「あ……」

大和、魚になる。

■第四幕・三場■

神楽宿、夕方。

花が一人、足の生えた土偶の側で紙の束に絵を描いている

七生がくる。

七生「今、村のみなさんが魚になりました。会長も大次さんも千鶴奥さんも所長もみんな」

花「そうけ」

七生「草野さんは那美江奥さんと一緒でした。小菅先生は最後までお年寄りの避難を手助けし、牟礼さんは火の見やぐらで巨大な魚を見張っていた」

花「悲しまんでいい。うったちも、もうすぐ魚になるよ」

七生「なりません。必ず止めます」

花「夕留教授ん論文、読んだっちやる？ これはもう決められたこつよ。なんちゅっ
たかね、人ん体を作る元……」

七生「遺伝子ですか？」

花「それん書かれちよっげな」

七生「恐竜がいなくなつて人が栄えたように、人も消えて新しい世界が始まる」

花「大昔かい何回も何十回も繰り返されちきた。世界んなすこつは止められん」

七生「教授は二年前、あなたの元を訪れました。あなたはこの事態を解決する鍵となる」
花「……」

七生「海を漂う神の帰りを待つ一族。その一族が務めを果たすには、最後まで地上に残らなければならぬ。教授の論文はあなたについて調べるところで終わっています。しかしその後、教授は毒をあおった。一体、何があつたんですか？」

花「……」

七生「花さん」

花「……なんも」

七生「？」

花「なんも分からんかったとよ。他人人とうちとで、なんも違つちよつとこやらねえと。血やら髪ん毛やら調べちみてんなんも見つからん。結局教授は諦めたつちや」

七生「……」

花「あんね、匂いがすつと」

七生「匂い？」

花「世界が壊るつたびん、甘えして切ねえ匂いがするつちや。今もしちよる。むせかえるこつある花ん匂いが胸ん中いっばいんあふれちよると」

七生「……」

花（土偶を見る）どんげな気持ちで作つたつちやろうかね。人が地上ん満ちる前ん日、人ん前んこん世界に暮らした者が。懐かしみてえつか、悼みてえつか。まるで小

「っちええお墓んどつあるわ」

沈黙。

七生「もう一度調べませんか？」

花「？」

七生「今からでも遅くはない。しかるべき研究機関に行って……」

花「もう始まつちよつとよ。間に合わんわ……」

七生「(遮る)教授が調べたあなたのデータは残っていませんか？ あるいは論文の続きは？」

花「じゃき……」

七生「僕は魚になっていない。個人差がある。最後まであがきたいんです。(土偶を指す)これは墓なんかじゃない。作られたのは懐かしむためでも悼むためでもない。確かにここにいたのだとこの世界に刻むため。僕はそう思います」

見つめ合う花と七生。

花、描いていた絵を差し出す。

人間の赤ん坊の絵。

七生「(絵を見て)赤ちゃん……ですか？」

花「もしあなたが魚んならんで陸(おか)ん残ったら、こん絵も一緒ん残しちやって。世界には、人っちゅう変わった生き物がおった。そん証じゃ」

受け取る七生。

日が暮れていく。